

みんなで作る こどもの居場所

～仙台こども財団 令和7年度調査報告書～





TAMARIBA/縁寿屋 P.1

住宅街の一角にある白い建物「TAMARIBA / 縁寿屋」は、駄菓子屋を中心にカフェや美容室が並ぶ小さな複合施設です。(宮城野区岩切)



人と人、世代をこえて
「みんなの笑顔」をつなぐ



子どもと大人で楽しむボッチャ P.5

スポーツを通して世代間交流を図り、福祉の向上を目指すことを目的に、第2回交流サロン「子どもと大人で楽しむボッチャ」が開催されました。(泉区虹の丘)

子どもおともも
みんなの笑顔が花咲くまちに



みんなのBASE P.13

子どもたちが安心して過ごせる「安全基地」としてスタートした「みんなのBASE」。今では多世代を超えた関わりが生まれています。(青葉区五橋)

子どもたちの「やってみよう」を支える、
多世代が集う居場所

集まっペクラブ P.17

第4回となる「集まっペクラブ」は、1歳の子どもから95歳の先輩まで、過去最高となる70名もの参加者が集まりました。(太白区西中田)



「みんなのBASE」が心地よい地域の居場所



すまいる食堂 P.9

「すまいる食堂」は、子どもだけでなく、一人暮らしの高齢者や家族連れも参加する、世代を超えて集う「みんなの食堂」です。(若林区荒町)

子どもとつくろう！
みんなの笑顔がつながる居場所



令和7年度 子ども・子育てシンポジウム P.21

令和7(2025)年12月13日、「子どもとともにつくる多世代交流の居場所づくり」をテーマに、シンポジウムを開催しました。

有識者コメント P.30



人と人、世代をつなぐ“まちの架け橋”

たまりば

えんじゅや

TAMARIBA/縁寿屋

仙台市宮城野区岩切。

住宅街の一角にある白い建物「TAMARIBA / 縁寿屋」は、駄菓子屋を中心に、カフェや美容室が並ぶ小さな複合施設です。遠藤聡さん・靖子さんご夫婦と、聡さんのお姉さんのひろえさん、妹さんの洋子さん、4人で運営しています。世代を超えて人が集い、笑顔が行き交うこの場所の魅力を伺いました。

● 記憶を受け継ぎ、“もう一度、駄菓子屋を”

TAMARIBA / 縁寿屋は、かつてこの地で長く親しまれていた「遠藤商店」の記憶を受け継いで生まれました。明治時代、聡さんの曾祖父・遠藤常吉さんが仕出し屋を始め、その後、塩やタバコ、駄菓子など生活用品を扱う店へと姿を変えながら、地域に根差した商いを続けてきました。しかし昭和60年、常吉さん亡き後お店を引き継いでいたお祖母様が亡くなり、店の歴史に幕を下ろします。

年月を経て、家族の中で「もう一度、駄菓子屋を」という想いが芽生えました。「主人をはじめ、義姉も義妹も、幼い頃に駄菓子屋で過ごした時間が強く心に残っていて。あのとき感じた楽しさや人のあたたかさを、今のこどもたちにも味わってほしいという想いが少しずつ膨らんできたんですね」と、靖子さんは話します。

一方で、遠藤家の周辺も、かつて農家が多かった風景から、新興住宅が建ち並ぶ地域へと変わりました。若い世代が増え、地域の顔ぶれが変わりつつあるなか、コロナ禍の影響も重なり、住民同士が顔を合わせる機会は少なくなっていました。

「昔からの住民と、新しく転入してきた方をつなぐ“架け橋”になりたい。地域に新しいにぎわいをつくって、老若男女が自然に集える、ランドマークのような場所ができたらと思うようになったんです」。

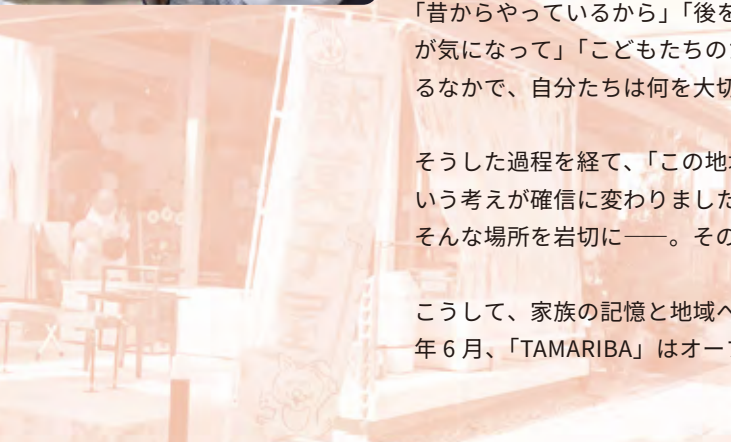
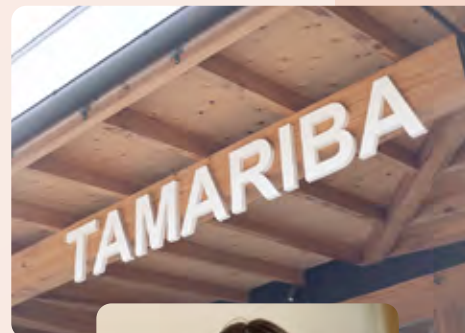
人と人とのつながりが、少しずつ薄れていくように感じるなかで、靖子さんたちは改めて「集える場所」の必要性を考えるようになりました。ただ駄菓子屋を再開するのではなく、「どんな駄菓子屋にしたいのか」を考えるため、家族で駄菓子屋の聖地に数えられる名古屋を訪れ、いくつもの駄菓子屋を巡りました。

2日間で回った店舗は9軒ほど。誰かの紹介ではなく、Instagramなどで評判を調べ、自分たちの足で訪ねてきました。間取りやインテリア、メニューの内容を見るだけでなく、どんな想いで駄菓子屋を続けているのか店主に話を聞きながら、駄菓子屋再開のイメージを固めていきました。

「昔からやっているから」「後を継いだから」という老舗の声もあれば、「地域のつながりが薄れていることが気になって」「こどもたちのために何かしたくて」と話す、若い経営者もいました。様々な在り方に触れるなかで、自分たちは何を大切にしたいのか、その輪郭が少しずつはっきりしていったといいます。

そうした過程を経て、「この地域を盛り上げるには、やっぱり人と地域とのつながりがもう一度必要だ」という考えが確信に変わりました。「新しい賑わいが生まれる場、老若男女が関係なく集えてほっとできる場、そんな場所を岩切に——。その思いから、“TAMARIBA(たまり場)”と名付けました」と、靖子さんは話します。

こうして、家族の記憶と地域への想いが重なり合い、新旧の住民が交わる岩切のまちに、令和5（2023）年6月、「TAMARIBA」はオープンしました。



●誰もが安心できる、あたたかな空間設計

TAMARIBA は複合施設全体の名称で、その一角にある駄菓子屋が「縁寿屋」です。カフェや美容室と並びながら、地域の人々が気軽に集う小さな拠点となっています。

空間づくりでは、「人が集まり、自然に会話が生まれる場所」を目指して設計されました。手がけたのは、「人の集う場」の設計を得意とする建築士です。道路から緩やかなスロープを設け、ベビーカーや車椅子でも入りやすいよう配慮されています。

「奇抜ではなく、街並みに馴染みながらも“何かありそうだな”と、思わず足を止めてもらえる建物にしたかったんです」と、靖子さん。外観や内装には木目をできるだけ活かし、初めて訪れる人でも、どこかほっとできるような、あたたかみのある空間に仕上げています。

カフェ、美容室、駄菓子屋の縁寿屋は緩やかにつながり、誰もが自然に行き来できる動線に。カフェに来たおとなが駄菓子屋に立ち寄りたり、こどもが少し背伸びをしてカフェのワッフルを頼んだり——。そんな日常の行き来が、場に心地よい交わりを生み出しています。

建物の軒下は広く設計され、縁寿屋で買った駄菓子や、たませんなどの軽食を食べたり、休んだりできる場所になっています。カーテンレールが設置されており、雨の日にはビニールカーテンを下ろすこともできます。天候に左右されにくく、こどもたちが安心して過ごせる工夫の一つです。

また、敷地の角にあえて看板を設置することで、駐車場に入る車の進入速度を抑えるようにしています。運転する側には少し不便に感じられるかもしれませんが、こどもの安全を第一に考えた配慮が、こうしたところにも込められています。



●得意分野を生かす家族チーム

TAMARIBA 代表の聡さんは一般企業に勤める傍ら、地域の活動に積極的に関わり、まちと店をつなぐ“顔”のような存在です。ひろえさんは、商品企画や仕入れを担当し、飲食店や美容などの情報にも明るいアイデアマン。イベント時には企画の中心となり、場ににぎわいを添えています。

洋子さんは、安全面や衛生面、価格設定などを担っています。こどもや親が安心して過ごせるかどうかを日々考えながら、細やかな判断を重ねています。そして靖さんは、経理・事務を担当し、事業の基盤を支えるまとめ役です。

「それぞれ違う得意分野があって、それを自然に出し合えるのが私たちの強み」と靖子さん。家族の絆と役割が重なりながら、この小さな拠点を支えています。

●会話が生まれる、あたたかな心の居場所

「こどもはもちろんですが、おとなも含めて、来てくれた人みんなにひと言は声をかけよう——。それが、私たちの心掛けなんです」。そう話すのは、洋子さんです。

挨拶や何気ない声掛けから始まるやり取りの中で、少しずつ関係が育っていきます。ひろえさんは、そんな日々の変化を、そばでうれしそうに見守っています。

「お父さんやお母さんと一緒に来ていた子が、小学校5年生くらいになると、今度は一人で来られるようになるんです。親や祖父母へのプレゼントを買いに来る子もいて。そういう姿を見ると、成長を感じられて、本当にうれしいですね」。



縁寿屋は、こどもたちにとって、何かを教えられる場所というよりも、話したいことを話し、聴いてもらえる場所です。「妹が生まれたよ!」といううれしい報告から、「友達と喧嘩しちゃった」「好きな人ができた」といった、親には少し話しにくい出来事まで、こどもたちは様々な気持ちを言葉にしてくれます。

「こどもだから、と決めつけず、そのときの想いや考えをきちんと受け止めることを大切にしています」と話すのは、靖子さんです。一人ひとりの言葉に耳を傾け、対話を重ねることで、こどもたちは自然と心を開いていきます。

こうした関係は、こどもたちに限ったものではありません。

ある日、常連の若い男性が「彼女ができました」と、照れながら報告してくれたこともあり、その後しばらくして、買っていくお菓子の量が増えたことに気づき、「もしや」と思っていたところ、「こどもが産まれました」と知らせてくれたといいます。

「人生の節目を、ふとした会話の中で共有してもらえるのは、うれしいですね。親戚のように見守るといふか、話しやすい雰囲気づくりは大事にしていますね」と、靖子さん。

縁寿屋は、こどもたちだけの場所ではありません。おとなにとっても、自分の人生の一部をそっと共有できる場所です。年齢や立場に関係なく、一人ひとりの言葉に耳を傾ける。そんな姿勢が積み重なることで、縁寿屋は、会話が生まれ、つながりが育つ、あたたかな心の居場所として、地域に根付いています。



● 小さな駄菓子屋は、“社会を学ぶ入口”

縁寿屋は、こどもたちが人との関わりや社会の仕組みを、日々のやり取りの中で自然に学ぶ場所にもなっています。

店はキャッシュレスではなく、必ず現金で支払う仕組み。「92円を100円ですすものいいけど、102円なら10円が返ってくるよね」と一緒に考えたり、「今の予算だと、これとこれは一緒に買えるかな?」と声を掛けたり、買い物の工夫を一緒に考えていきます。

こども一人ひとりには「ポイントカード」を発行し、楽しみながらお金の使い方を学べる仕組みを取り入れています。ポイント欲しさに買いすぎてしまわないよう「基本は一日1ポイント」というルールを設けていますが、かき氷や100~200円の少し高いフード類には、プラス1ポイントが付くなど、楽しみながらもバランスを考えられる工夫がされています。

カードを持つことは、単なる特典ではありません。「自分で管理する」「自分で考えて使う」——。そんな経験を通して、こどもたちは少しずつ主体性を身に付けていきます。

成長とともに、友達との関係が広がるにつれて、こどもがむやみに友達におごろうとする場面も出てきます。そんなときも、頭ごなしに注意するのではなく、こどもが自分で考え、納得できるように言葉を掛けます。「友達に好かれたくておごるって、本当の友達の関係かな?」「おごってもらわなくても一緒に遊んでくれる友達っていいよね」など、人との関わり方についても丁寧に対話を重ねていきます。

こうした日常の積み重ねの中で、縁寿屋は、こどもたちにとって“社会を学ぶ入口”となっています。ここでの経験は、こどもたちの心に、確かな“生きた学び”として刻まれています。



● 家族と地域の時間が重なる場所

TAMARIBA では、6月の周年祭、夏の縁日、秋のハロウィーンなど、季節ごとに地域の人が集うイベントを開催しています。

ハロウィーンイベントでは、仮装をして参加するこどもたちの姿も見られ、「楽しみにしてくれていることが、本当にうれしい」と、靖子さんは話します。イベントごとに限定メニューを用意するなど、ささやかな工夫も重ねています。

こうした行事では、縁寿屋が始まった頃に一度訪れたとき、普段はなかなか足を運ぶ機会が少ない人が、顔を見せてくれることもあります。遠方から足を運んでくれるその姿に、靖子さんはTAMARIBAを通してつながりが途切れずに続いていることを実感するそうです。

駄菓子屋をきっかけに、人が集い、笑顔が重なっていく——。そんな時間が、TAMARIBAの日常に息づいています。

また、イベントの場では、縁寿屋のご家族の姿も重なります。射的コーナーでは、4歳の息子さんが「僕もやる」と言って手伝いに加わったこともありました。「主人の真似をしながら、一生懸命、ルールを説明していて。頼もしくなったなと思いました」と、靖子さんは振り返ります。

お手伝いの輪は、家族全体へと広がっています。高校生の姪がレジを担当したり、社会人の息子さんも、かつては店番を手伝ったりしてきました。TAMARIBAのオープン時は大学生でしたが、おとなとも、こどもとも、すぐに打ち解けることができその人当たりの良さが仕事でも生かされているようです。「ここでの経験が、こどもたちの力になっていると感じます」と、靖子さん。

縁寿屋の家族は、それぞれの関わり方の中で、お手伝いを通して少しずつ経験を重ねてきました。TAMARIBAには、そんな小さな成長が、静かに連なっています。

● 昔と今をつなぐ「まちの架け橋」

TAMARIBAは、地域の拠点として多世代に開かれています。

老人会やこども会、近隣の小学校や放課後等デイサービスなどからも利用され、安心して買い物や交流を楽しめる場として、少しずつ地域に根付いてきました。

「この地域は人のあたたかさにあふれています。通学路の雪かきをしてくれるおじいちゃんがいったり、こどもに声を掛けてくれる人がいたり。そうした“見えない支え”が、この地域のあたたかさを形づくっているんです。そのことを、こどもたちにも伝えていきたいと思っています」と、靖子さんは話します。

TAMARIBAは、新しく越してきた人と昔から住む人が自然に交わる“まちの架け橋”として、岩切の地域にそと根を張っています。

目指しているのは、駄菓子屋を通して「また帰りたい」と思える地域をつくることです。「いろいろなことがあっても、ここでの楽しい思い出が、ふっと心に浮かぶような場所でありたい」。

目の前の人との関わりを大切にしながら積み重ねてきた日々。その一つひとつが、地域のあたたかさとして、そしてこどもたちの記憶として、静かに残っていきます。

今日もTAMARIBAでは、家族のあたたかな視線と小さな会話が重なり合い、未来へとつながる笑顔が生まれています。



こどももおとなも。みんなの笑顔が花咲くまちに

子どもと大人で楽しむボッチャ



令和7（2025）年11月8日、仙台市泉区の虹の丘コミュニティセンターで、第2回交流サロン「子どもと大人で楽しむボッチャ」が開催されました。スポーツを通して世代間交流を図り、福祉の向上を目指すことを目的に行われるこのイベント。当日は、こどもから高齢者まで幅広い年代の77名が参加しました。

会場では、顔見知り同士はもちろん、初めて顔を合わせる人同士も声を掛け合いながら競技に臨み、コートの中には自然と応援の声が広がっていました。こどももおとなも同じ場に集い、世代や立場の違いを超えて時間を共有する姿が、会場のあちこちで見られました。

平成30（2018）年に始まった、こどもたちとの交流イベント

この大会を主催したのは、虹の丘地区社会福祉協議会（以下、地区社協）です。

地区社協では、これまで主に高齢者を対象としたサロン活動や見守り活動を中心に、地域福祉に取り組んできました。一方で、地域の高齢化が進む中、子育て世代やこどもたちが地域活動に参加する機会が少なくなっていることも、徐々に課題として意識されるようになってきました。

こうした声を受け、地区社協では、こどもたちが地域のおとなと自然に関わることのできる場づくりに取り組み始めました。その一つが、平成30（2018）年に開催したクリスマス会でした。

当時の様子について、虹の丘地区社会福祉協議会会長の西本久子さんは次のように振り返ります。

「私が会長になった平成28（2016）年頃から、『地域全体のこどもさんたちや若い方たちとも、何か一緒にできることをやりましょう』という声が上がってきました。それで、平成30（2018）年にこどもたちを対象にしたクリスマス会を始めました。クリスマスとは直接関係ないんですけど（笑）、カレーを作ってみんなで食べて、サンタの格好をしてプレゼントを配りました。こどもさんも30人くらい来てくれて、とてもにぎやかでした」

この取組は、こどもたちにとっては地域のおとなと触れ合う貴重な機会となり、また、地域のおとなにとっても、こどもたちの存在を身近に感じる場となりました。地区社協の活動が、高齢者だけのものではなく、世代を超えた交流の場へと少しずつ広がっていく、一つのきっかけとなったのです。



その後も、警察官を招いての交通安全の紙芝居など、地域と連携したイベントを開催し、子どもたちと地域のおとなが顔を合わせる機会を重ねてきました。いずれも、特別なことをするというより、子どもたちが地域の中で自然に過ごし、声を掛け合える関係を築くことを大切にしたい取組でした。

しかし、こうした活動は、新型コロナウイルス感染症のまん延により、地域で人が集まる機会は大きく制限され、地区社協のイベントも約5年間、中止を余儀なくされました。その間、子どもたちの声を聞く機会や、世代を超えて顔を合わせる場は少なくなり、地域全体の交流に「空白の時間」が生まれていきました。

だからこそ、感染状況が落ち着き始めた頃、地区社協の中では「もう一度、地域の中に人が集まるきっかけをつくりたい」「世代を超えて顔を合わせる場を取り戻したい」という想いが、自然と共有されていきました。

「コロナが落ち着いた時に、ポッチャの道具を借りる機会があり、みんなで楽しみました。その時に『これなら子どもおとなも楽しめる』と思って、助成金でポッチャの道具を二つ購入しました。それが去年の第1回目のポッチャ大会のきっかけ。今年は2回目で、去年より10人ほど参加者が増えています」と、西本さん。

●「虹の丘ルール」で子どもおとなも大盛り上がり！

ポッチャは、ジャックボールと呼ばれる白いボールに、赤と青のカラーボールをいかに近づけるかを競う、ヨーロッパ発祥のパラリンピック公式競技です。年齢や体力、障がいの有無に関わらず、誰もが同じルールのもとで楽しめる点が特長です。虹の丘のポッチャ大会では、公式ルールに則りながらも、少しアレンジした“虹の丘ルール”を適用しています。

地区社協副会長の田野崎博さんは、「審判長を務めてくださったのが、シニアクラブでポッチャをされている方だったので、いろいろと教えてもらいながら進めました」と話します。公式ルールに準拠しつつも、ホール内に3つのコートを設定するため、1コートあたりの広さを狭くするなど、参加者全員が無理なく楽しめるよう工夫を重ねられました。

地区社協副会長の佐々木啓一さんは、「公式ルールにこだわりすぎると、どうしても待ち時間が長くなってしまいます。今日は、できるだけ多くの人にポッチャを体験してもらえるように、進行の仕方も工夫しました」と話します。

試合が始まると、コートの上からは「もっと右！」「いけー！」といった声援が飛び交い、子どもおとなも関係のない真剣勝負が繰り広げられました。うまくいったプレーには拍手が起り、思いどおりにいかなかった場面でも、周囲から励ましの声が掛けられるなど、会場全体が一体となった雰囲気に包まれていました。

“虹の丘ルール”は、勝ち負けだけを目的とするものではありません。誰もが参加しやすく、声を掛け合いながら楽しめることを大切にしたい、地域ならではのルールです。その結果、初参加の子どもから高齢者まで、幅広い世代が同じ場で自然に交流する時間が生まれていました。



大会参加者で89歳の福田さんは、「なんか子どもたちとできるって聞いてきたんだけど、楽しかったねえ」と笑顔を見せます。初めてのポッチャでしたが、「ひ孫よりちょっと上の子と話してね。私のボールもいいところまで行ったんだよ！」と、試合の様子をうれしそうに振り返ってくれました。

そして、試合で大活躍した一人である中学校3年生の長田さんは「去年の大会にも参加してとても楽しかったので、今年も参加しました」と話します。普段は中学校の科学部に所属し、プログラミングやロボット制作などに取り組み、「球技は普段、児童センターでドッジボールをするくらい」だと言います。



ボッチャについては、「考えながら投げるところが面白い」と感じたようで、試合ではチームメイトと声を掛け合いながらプレーしていました。戦略や工夫が活きる競技であることが、幅広い世代の参加につながっていることもうかがえます。

「おじいちゃん、おばあちゃん世代の方たちと一緒にプレーしましたが、みんなとっても優しくしてくれました。来年は高校生になるけど、できるならまた参加したいです」と笑顔を見せてくれました。

その様子を見守っていた長田さんのお母さんは、「虹の丘は、お隣同士の関係がとても良く、住んでいて安心できるコミュニティだと感じています。分からないことがあれば教えていただくことも多く、町内会でも本当によくしていただいています」と話します。大会を通して、親子で地域の人たちと関わる時間を持てたことが、日常の安心感にもつながっているようでした。



同じく親子で参加していた須崎さんも、昨年に続いての参加です。

「昨年は、こども会の役員をしていたので、ボッチャ大会をお知らせする資料を作り、それをきっかけに参加しました。息子が地域の方から『センスがあるね』と言っていたので、それがうれしかったようで、『また参加したい』と言っていたので、今年も参加しました」と話します。

また、「仕事をしていると、地域の方と会う時間帯がなかなか合わないのですが、この大会をきっかけに、休日などで顔を合わせたときに、挨拶や会話ができるようになりました」と、大会を通じた変化を語ってくれました。

ボッチャ大会を通して、地域の中で顔を合わせ、声を掛け合う関係づくりにもつながっているようでした。



● 家族の新たな一面を発見することも

佐々木さんは、「今日も家族で申し込んでくれた方もいてね。そういうのでできるっていうのはとてもいいと思いますね」と話します。大会には、こどもだけでなく、保護者も同じチームの一員として参加し、世代を超えた交流の輪が自然と広がっていました。

田野崎さんは、親子で参加することの意義について、次のように話します。「こどもは、家庭の中での親の姿しか知らないことが多いですよ。でも、こうして地域の中で一緒にボッチャをやると、普段とは違った一面を見ることになります」。

例えば、試合の中でボールを投げ、うまく決まった場面では、周囲から自然と「すごい」「いいね」と声が掛かります。そうした場面を通じて、こどもたちは、親が地域の中で他の人から認められ、応援される存在であることを実感します。



「お母さんやお父さんが褒められる姿を見ると、こども自身も誇らしい気持ちになるんです。そういう経験が、こどもにとっては大きな高揚感につながると思います」と田野崎さんは続けます。

このように、田野崎さんは、親子で多世代交流の機会に参加することは、こどもにとって社会や地域の中での親の姿、一人の人としての親の姿に接する機会になる、と話しました。多世代交流は、地域のこどもとおとなが出会い、交わるだけではなく、こどもとその親との間にも、新たな気付きや変化をもたらすきっかけになるのかもしれない。



● こどもたちは地域で育ち、地域が育てる

地区社協主催のポッチャだけではなく、各町内会でも、七夕やスイカ割りなど、様々な世代間交流イベントがあるそう。

「四丁目町内会では、高校生、大学生のボランティアさんが7月、8月に必ず来てくれて。本の読み聞かせなんかをしてくれるんです。こどもたちも若いお兄さんお姉さんが読んでくれるのがうれしいみたい。こどもたちが大きくなった時に『地域でこういったことをしてもらっていたよね』と思ってくれたらうれしいです」と、西本さん。

地区社協として活動する中で、こうしたイベントの準備が大変ではないか尋ねると、「大変だと思ったこと、ないんですよ」と微笑みます。「町内会でも集会所で福祉委員がサロンを開くなど、普段から皆さんチームワークがいいんです」と、日頃の協力体制があり、地区社協が一丸となって取り組んでいることを教えてくれました。

そして西本さんは「ある方が『本当に虹の丘に来てよかった』っておっしゃって、その言葉がすごく残っているんです。なので、『ここにいてよかった』と思える地域にしていきたいですね」と笑顔をのぞかせました。

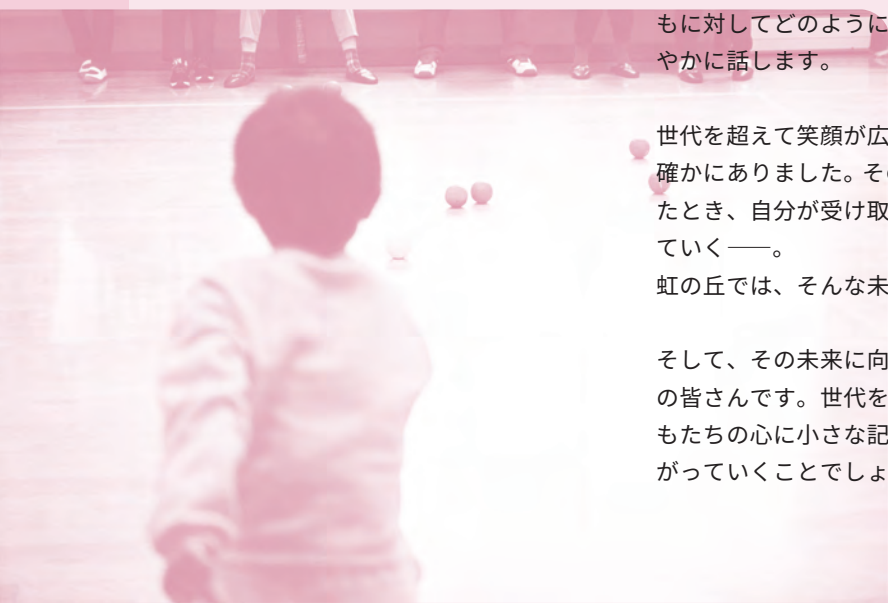
佐々木さんは「世代交代をしながらも、地域がまとまっていけるような場をつくっていきたいですね。地域の人々との関わりを広げるという面では、こういうイベントなんかも、少しは役に立っているのかもしれないね」と。

田野崎さんも「こどもっていうのは地域の中で育つし、地域で育てる。人と人との間で成長していくものだから、自分がそのような環境で育ったことは認識してほしいです。そうすると自分がおとなになった時に、自分のこどもや地域のこどもに対してどのように接すればいいのかを振り返ることができるでしょう」と穏やかに話します。

世代を超えて笑顔が広がる虹の丘には、こどもたちを包み込む優しいまなざしが確かにありました。そのまなざしの中で育ったこどもたちが、いつかおとなになったとき、自分が受け取った温かさを思い返しながらか、次の世代へとそっと手渡していく――。

虹の丘では、そんな未来の姿を思い描くことができます。

そして、その未来に向けて歩みを進めているのが、西本さんたち虹の丘地区社協の皆さんです。世代をつなぐ場づくりを丁寧に積み重ねるその姿は、やがてこどもたちの心に小さな記憶となり、地域のつながりを受け継ぎきっかけへとつながっていくことでしょう。



多世代がつながる“みんなの食堂”

しよくどう すまいる食堂

仙台市若林区荒町。荒町市民センターの一角では、奇数月の第3土曜日になると、にぎやかな食卓が広がります。「すまいる食堂」は、こどもだけでなく、一人暮らしの高齢者や家族連れも参加する、世代を超えて集う“みんなの食堂”です。

この場所を運営しているのは、荒町地区社会福祉協議会、荒町地区民生委員児童委員、仙台市社会福祉協議会若林区事務所、五橋地域包括支援センターの皆さんに加え、東北学院大学セツルメント会、五橋中学校のボランティア、地域のボランティアなど、多様な担い手たちです。調理場ではおとなと学生、生徒が肩を並べ、会場では利用者同士の会話が自然に生まれています。

● はじまりは、地域のこどもたちのために

すまいる食堂がスタートしたのは、平成28（2016）年12月です。きっかけをつくったのは、荒町地区連合町内会会長も務める、荒町地区社会福祉協議会会長の武川由美子さんでした。

「荒町は、仕事を持っているお母さんが多くてね。それで、こどもだけでご飯を食べているということ聞いたものですから、『何とかしたい』と思ったのが最初でした。」

武川さんは「世代を超えて、誰もが居心地よく過ごせる場所をつくりたい」とずっと思っていました。「当時、荒町地区民生委員児童委員協議会と荒町地区社会福祉協議会、両方の会長を務めていたので、すまいる食堂をやりたいと相談したら、みなさん『いいわよ』と言ってくれて始まったんです」と話します。

「あまり難しく考えていたわけではなくて、まずはやってみようという気持ちでした」。武川さんの語りからは、まずはできることから始め、地域の中で少しずつ形にしてきた姿勢がうかがえます。



● こども食堂から「みんなの食堂」へ

当初は、こどもが中心で10人に満たない規模でした。そこから「みんなの食堂」へと変化していくきっかけになったのが、「テレビ相手に食べても、おいしくないのよ」という高齢者の声でした。

その言葉を受け、ポスターに「どなたでも」と加えると、世代の輪が少しずつ広がりました。今では利用者の半分近くが高齢者で、食堂の日を心待ちにしている人も少なくありません。

「荒町市民センターだよりで申込み方法を記載しているのですが、申込み初日になると、予約の電話が朝6時半過ぎにかかってくるんですよ。『〇〇です、予約お願いします』って。だから、朝6時半にスマホとメモ用紙を置いてスタンバイしているの。それだけ楽しみにしてくださっているんだなと思います」と武川さんは笑顔で話します。

通い続けるうちに、常連の高齢者の間では“自分の席”も自然と決まっていきます。顔見知り程度だった人たちが、「今日はあの人来ないね」「風邪かな」と互いを気遣い合うようになり、いつの間にか“仲間”になっていく。その関係が育っていく様子を見て、「続けてきてよかった」と、武川さんは話します。



● 通い続ける中で生まれる変化

利用者からは、世代や立場を超えて、さまざまな声が聞かれました。

「おいしかった」「バランスが取れている」といった食事の感想に加え、一人暮らしの高齢者からは、家では一人で食べるのが多く、「壁に向かって食べるのとは違って、ここでみんなと話しながら食べられるのがうれしい」「ここに来ると、自然と会話が生まれて気持ちが明るくなる」といった声が聞かれます。

また、誘われて初めて参加した人からは、「最初は少し緊張したけれど、みんなで食事をするうちに自然と打ち解けられた」「一人で食べるより、やっぱり誰かと一緒にのほうがいいですね」といった声も聞かれました。



食事の内容だけでなく、「誰かと同じ空間で食べること」「言葉を交わること」そのものが、参加する人の安心感や楽しみにつながっていることがうかがえます。

すまいる食堂に3年ほど家族で通う齋藤さん一家にもお話を聞きました。「家を出ると、ご近所さんが『今日(すまいる食堂に)行くんだね』と声を掛けてくれるんです。中学生の娘にも自然と声を掛けてくれて」とお父さん。

お母さんは「今は家族と一緒に来ていますが、娘が高校生になったら、友達と来て全然知らない方とも話して、積極的にコミュニケーションを取れるようになってほしい」と教えてくれました。



● 大学生ボランティアがもたらす“学び”と“役割”

すまいる食堂では、東北学院大学のボランティア団体「セツルメント会」の大学生ボランティアが、調理補助や設営などを通して、運営に関わっています。調理を終えた後は、高齢者や子どもたちと同じ空間で食事とともにしながら活動することで、自然な形で世代を超えた関わりが生まれています。

参加するようになったのは、コロナ禍で活動の場を探していた顧問の先生が、武川さんに相談したことがきっかけでした。「どなたでもどうぞ」というすまいる食堂の姿勢のもと、学生たちは定期的に足を運ぶようになり、今では運営に関わる一員として定期的に参加しています。

5回目の参加となる大学3年生の設楽さんは、「参加する前は20～30人くらいの小規模な食堂だと思っていました。でも実際は100人あまりの人が訪れるので、作る量もけっこう多くて、正直驚きました」と振り返ります。

設楽さんは、この活動を「ただの奉仕で終わらない」と感じていると言います。「チームの一員として動く感覚があって、周りを見て動くことや、声を掛け合うことの大切さを学びました」。高齢者と会話を交わす中で、地域の歴史やこれまでの暮らしについて聞く機会も多く、「自分が知らなかったことを教えてもらえる時間でもある」と話します。

「すまいる食堂と大学はすぐ近くなので、周辺を歩いていると『あ！すまいる食堂のお兄ちゃんだ！』と話し掛けてくれてうれしいです」。設楽さんにとって、子どもと日常的に関わる経験は、学びの場にもなっています。

4回目の参加となる遊佐さんは、「ボランティアの中学生には自分から話し掛けて、楽しい雰囲気をつくることを意識するようにしていたら、コミュニケーション能力が身に付いたと思います」と、自身の成長につながっているといいます。

「貢献するのが好きだと気付けた」という学生や、人見知りながらも「世代を超えて気兼ねなく料理を楽しめる雰囲気をつくりたい」と話す学生もいて、ボランティアの参加は若い世代が“新しい自分”を見つける機会にもなっています。

●中学生ボランティア——「やってみよう」が力になる

五橋中学校の生徒も、すまいる食堂のボランティアとして参加しています。参加するようになったのは、同校の学校運営協議会の委員をしている武川さんが会議に参加した際、校長先生が「生徒たちにボランティアをしてほしいが、受け入れてくれるところありますか」と言っていたことから、「校長先生、すまいる食堂どうぞ」と伝えたのが始まりです。

初めての活動は、きゅうり 70 本分の浅漬づくり。「とてもおいしくできて、今では十八番メニューです。ない日には『今日はきゅうりないの?』と聞かれるくらい」と武川さんは笑います。

話を聞いたのは、全員中学校 1 年生。初めて参加する村上さんは「すまいる食堂に食べに来たことがあって、おいしかったからボランティアをしたくなった」と話します。同じく初参加の跡部さんに参加の理由を聞くと、「何もしないでボーッと過ごすよりは、ボランティアやったほうがいいのかと思って」と、キリッとした表情で答えてくれました。2 回目の参加である及川さんは「前よりも上手く作業ができたし、今回は自分から仕事を探すことができたかなって思います」と話してくれました。

こうした小さな変化が積み重なり、学校の中でも行動に変化が表れているといいます。教頭先生からは、「学校で困っている子を助けるようになった」「今まで動かなかった子が、自分から先に立って行動するようになった」といった報告も届いているそうです。“人のために動くこうとする姿勢”が、少しずつ育っていることがうかがえます。



●小学生へと広がる、すまいる食堂での変化

大学生や中学生が真剣に動く姿は、食事に来る小学生たちにもいい影響を与えています。自然と「誰かのために役に立ちたい」気持ちが広がっている、と武川さんは言います。

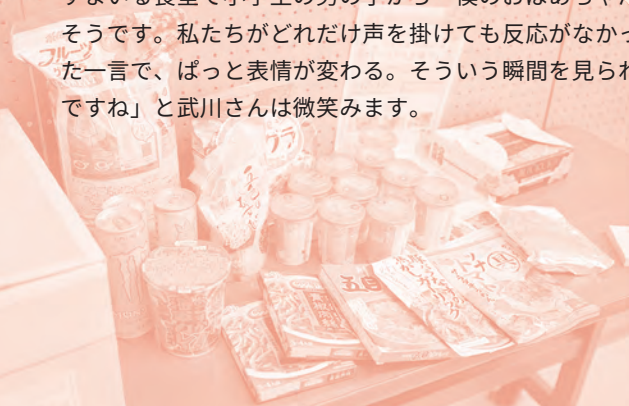
「杖をついて食堂に入ってくる高齢者を見つけると、お茶を紙コップに入れて持って行く子がいるんです。お箸を落とした人がいると、『あのおばあちゃん、落としたよ』と教えに来てくれて、『持って行ってくれる?』と言うと、渡しに行ってくれて。ニコニコしている姿を見ると、きっと“ありがとう”って言われたんでしょうね。“ボランティアしなさい”なんて言わなくても、自然と誰かの役に立とうとしてくれるんです」と武川さんはその広がりをうれしそうに語ります。



●おとなにも広がる、すまいる食堂でのあたたかい変化

すまいる食堂では、こどもだけでなく、おとなにもうれしい変化が生まれています。

盛岡から荒町に引っ越してきた 80 代の女性は、誘われてすまいる食堂に通っていたものの、笑顔も少なく会話も反応が薄く、武川さんは心配していました。しかしある日、ニコニコして入ってきたそうです。「理由を聞いたら、前回のすまいる食堂で小学生の男の子から『僕のおばあちゃんになって』と言われたそうです。私たちがどれだけ声を掛けても反応がなかったのに、小学生のたった一言で、ぱっと表情が変わる。そういう瞬間を見られるのも、すごく楽しいですね」と武川さんは微笑みます。





●調理を支えるのは地域のおとなたち

すまいる食堂の調理や会場設営を長年支えてきたのが、荒町地区社会福祉協議会をはじめとした地域のおとなたちです。立ち上げの頃から関わってきた人もいて、調理場では世代の異なるボランティアと肩を並べながら、毎回の食事をつくっています。

大学生や中学生がボランティアとして加わってくれるようになってから、会場設営や下準備がスムーズになり、「本当に助かっています」という声が聞かれたり、「みなさん本当に素直で、一生懸命なんです」と目を細める姿が見られたりします。

「何をしたらいいですか？」と自分から声を掛け、食材の切り方を伝えると、「はい」とすぐに対応する。その姿に「もう褒めっぱなし。孫のように可愛がっています」と笑顔がこぼれます。

調理に携わる人たちにとって、何よりのやりがいは、「おいしかった」の言葉です。わざわざ調理場まで来て声を掛けてもらえることもあるそうです。また、食堂の日を楽しみに待っている人がいることが、活動を続けていく大きな力になっています。運営側にとってもすまいる食堂は、人と人のつながりを実感できる大切な場所です。



●すまいる食堂が目指す未来——「こんにちは」がつくる地域

「世代を超えて、誰でも居心地よく過ごせる場所でありたい」——すまいる食堂の願いは、開設当初から変わりません。

かつては、黙って入ってきて、黙って食事をして帰る子どもたちも多かったといいます。武川さんは、入口近くの席に座り、入ってくるたびに「こんにちは、こんにちは」と、声を掛け続けてきました。

その積み重ねの中で、子どもたちも少しずつ変わっていきました。自然と「こんにちは」とあいさつを返すようになり、中には「お邪魔します」と言って入ってくる子もいます。おとな同士が声を掛け合い、子どもに「おかえり」と声を掛ける——そんな光景も生まれるようになりました。

印象に残っている出来事として、武川さんは、ある日のことを振り返ります。小学校卒業を迎えたドッジボールクラブの子どもを中心とする男子13人が、横一列に並んで武川さん呼びに来ました。そして一斉に、「いつもおいしいご飯、ありがとうございました」と伝えてくれたといいます。「今まで、そんなことを言ってくれた子はいなかったので、本当に驚いて、声が出なかった」と、武川さんは話します。

「結局、声掛けなのよ。『こんにちは』が大事」。その言葉には、人と人がつながる地域づくりの原点が込められています。

そして武川さんが思い描く荒町の未来は、「気軽に声を掛け合える地域であってほしい。外に出たら『どこ行くの?』と一言でも声を掛けられる、そんな場所がいいんです」。

声を掛け合えるまち。誰かを一人にしないまち。すまいる食堂は、そのための“よりどころ”であり続けることを目指しています。



みんなのBASE

仙台市青葉区五橋。ビルの1階にある「みんなのBASE」は、中高生を中心に、こどもたちが安心して過ごせる「安全基地」としてスタートしました。

荒町小、連坊小路小、東二番丁小などに通うこどもたちがみんなのBASEで出会い、その後同じ中学校に進学して顔を合わせることもあるそうです。放課後に友だちと待ち合わせる場所として、あるいは学校から家に帰るまでの「少しの合間」に立ち寄るなど、日常の中に自然と組み込まれた居場所になっています。

今では子育て中の保護者や、孫の付き添いで訪れる高齢者など、世代を超えた関わりが生まれ、利用者は多い日で1日30人、月では延べ300人近くにのぼっています。



● みんなのBASEには、いくつもの“顔”がある

みんなのBASEでは、1つの場所を拠点に、「〇〇BASE」と名付けられた様々な取組が展開されています。

こどもの発案から生まれた「だがしやBASE」をはじめ、地域の集まりや相談の場として使われる貸しスペース「しえあBASE」、保護者向けの勉強会や学びの場を開く「まなびやBASE」、様々な「やってみたい」という声を一緒に考え、形にしてきた「よろずやBASE」、フリースクール「ふらっとBASE」など。

こうした取組は、利用者や地域の声を受け止め、様々な現場に立ち会う中で、広がっていきました。

● 「前向きな閉鎖」がひらいた、次の居場所づくり

「労働者協同組合ワーカーズコープ・センター事業団」を母体とする「仙台地域福祉事業所けやきの杜（以下、けやきの杜）」は、平成20（2008）年の設立以来、主に仙台市の指定管理者としての児童館の運営や小規模認可保育所の運営など、こどもの健全育成に取り組んできました。

その中で、かつては仙台市の児童クラブが小学校3年生までしか利用できなかった時期に、夜遅くまで働く保護者の声を受け、“1～6年生を夜8時まで預けられる民間学童”も運営していました。背景には、震災後に家族を亡くしたり、一人で生計を支えたりする保護者の存在があり、「3年生までは預けられるが、それ以降の預け先がない」「夜遅くまで働かざるを得ない」という切実な声が寄せられていたと言います。

その後、法律の改正で対象が6年生まで拡大したことで、民間学童は一定の役割を終えました。地域のニーズも変化する中で、職員の間で「前向きな閉鎖にしよう」という言葉が交わされました。





小学生を取り巻く環境は整いつつある一方で、中高生の居場所は依然として少ない—次に必要な支援は何かを考え始めた矢先、コロナ禍が訪れました。行き場が急に少なくなったこどもたちの姿の前に、「こどもの居場所が必要だ」という想いが、職員の中で改めて強まりました。児童館の自由来館がなくなり、密を避けるなどの利用制限が増えるほど、こどもだけでなく、支援する側や保護者の心にも閉塞感が生まれやすい時期だったと瀬戸さんは振り返ります。

こうして令和3（2021）年8月、こどもの居場所としてみんなのBASEが開設されました。開設にあたっての費用はけやきの杜が出資し、柔軟に判断できる体制があったことも、コロナ禍の状況に臨機応変に対応しながら活動を継続できた要因の一つになりました。

● 児童館で学んだ「みんなで作る」視点

みんなのBASEの根っこには、施設長の瀬戸さんが児童館勤務で児童厚生員として児童健全育成に長年関わってきた経験があります。「ここで大事なことは、ほぼ、こどもたちから教えてもらいました」と瀬戸さんは振り返ります。限られた時間や空間の中で、どうすればこどもたちが「今日、楽しかったな」と感じて帰れるのか。こどもたちの言葉や姿に向き合う日々の中で、「居場所づくり」の本質を学んできたと言います。

瀬戸さんが大切にしてきたのは、「ここは、おとなが一方向的に用意する場所ではない」という姿勢です。こどもたちもまた、関わりながらこの場を形づくっていく存在だと考えてきました。どのような場にするのか、安全面などからおとなが決めるを得ないことがある時も、こどもたちと一緒に考え、対話しながら場をつくる姿勢を持ち続けてきました。

瀬戸さんは、日々の関わりの中で感じてきたことを、次のように話します。「こどもたちの存在があることで、周りのおとなたちの関係も自然とやわらいでいくんですよ。こどもが育っていく姿と一緒に喜びながら、地域の人も、私たちも、保護者も、みんなでつながっていく。そうした関係性が育まれていくことを、何度も実感してきました」。

児童館での10年以上の積み重ねが、「こどもをまんなかにして、人と人が一緒に育つ場をつくる」という、運営の考え方に繋がっています。



● こどもの“やってみたい”が形になる「こども企画書」

みんなのBASEを象徴する取組が、こどもたちの“やってみたい”を形にする「こども企画書」です。きっかけは、利用者の小学校6年生が、「引越す友だちのお別れ会をみんなのBASEでしたい」と瀬戸さんに相談したことでした。

『「コロナ禍で家に集まることが難しく、ここで2時間だけできないか」という相談だったんです。『じゃあ、どんな内容にしたいのか、何人くらい集まるのか、必要なものは何かを、紙に書いてみて』と伝えたのが始まりでした』と瀬戸さんは振り返ります。

そのやりとりをきっかけに、カードゲーム大会や窓ガラスアート、夏まつりでの駄菓子屋一日店長など、こどもたちの企画が次々と生まれていきました。夏まつりの駄菓子屋では、現金の代わりに「BASEのお金」を用意し、こどもたちが売り買いを体験したり、終わった後に売上を集計して利益を計算したりする場面もありました。遊びの中に「工夫する」「考える」「責任を持つ」体験が自然と組み込まれています。

この日、遊びに来ていた小学生に企画書で実現してみたいことを聞くと、「カラオケ大会」「お泊まり会」「ファッションショー」など、次なる“やってみたい”の声が次々と返ってきました。

みんなのBASE こども企画書	
実施	
実施日	2023年 月 日() 時～ 時迄
実施場所	ワークショップ ・ 学習スペース ・ エコクラブ
実施内容	
実施者	
実施場所	
実施日時	
実施者	

こども企画書

- ・ なつまつり
- ・ ポケモンカードバトル大会
- ・ ペーごま大会
- ・ おどまり会
- ・ おわかれ会
- ・ 中学生男子だけ たこやきパーティー
- ・ バレンタインおかしづくり
- ・ ネイルアート体験会



瀬戸さんは、企画書を通して生まれる変化について、こう話します。

「誰かが実現している姿を見ると、『自分もできるんじゃないか』って思えるんですよね。その連鎖がすごく大事だと思っています。大切にしているのは、結果よりも“プロセス”です。どうしたいかを考えて、相談して、対話しながら決めていくことが大事。そのプロセスが、その子の自信や次の一歩につながります。

一方で、文字で考えをまとめることが難しいこどももいます。瀬戸さんは、話し言葉で一生懸命伝えようとする姿に出会ったことで、支える側の配慮の大切さにも改めて気付いたと言います。スタッフは、こども一人ひとりの状況に合わせて関わり方を工夫しながら、その想いが形になるよう支えています。どのような表現であっても「やってみたい」という想いが受け止められることが、こどもたちにとって安心して挑戦できる土台になっています。

「こども企画書」は、こどもたちが自分の考えを言葉にし、周囲と関わりながら実行していく力を育てる、みんなのBASEらしい取組として続いています。

● 地域にひらかれた居場所としての工夫

瀬戸さんが大切にしているのは、おとなが「教える側」として関わるのではなく、こどもの想いを尊重し、同じ目線で関わることです。「こどもとは対等でいたいと思っています。おとなだから上、ではないんです。ここは学校でも家庭でもない、唯一の『フラットな場』。だからこそ、目線を合わせて、一緒に考えたり話をするのが大事なんです」と瀬戸さんは話します。

実際にみんなのBASEには、地域のおとなが入り出る場面もあります。その際に大切にしているのは、「何かをしてあげる」関係にならないこと。おとなも一人の参加者として、こどもの声に耳を傾け、一緒に考え、気付きを共有しながら場に関わってきました。

多世代が入り出る場所だからこそ、「こどもの想いを最優先にする」という考え方を、関わる人同士で共有しながら大切にしています。おとなも「支える側」としてではなく、その場に居合わせる一人として、こどもと同じ目線で関わっています。



● だがしやBASEが生み出す、自然な対話の場

こどもと地域のおとなが自然に言葉を交わすきっかけとなっているのが、「だがしやBASE」です。駄菓子を買って、その場で食べながら、スタッフやその場に居合わせたおとなと、ふとした会話が始まる様子を、瀬戸さんは「立ち飲み屋みたいな感じ」と表現します。

カウンター越しに交わされる会話は、目的を持った「指導」や「相談」ではなく、何気ない雑談の延長です。家庭や学校とは異なる距離感の中で、こどもとおとなが同じ場に居合わせ、それぞれの言葉を交わしていきます。そうしたやりとりの積み重ねが、こどもたちにとって「話してもいい」「考えてもいい」と感じられる土台をつくっています。

一人の中学生が、とある悲しい出来事をきっかけに、命について問いを投げかけたことがあったそうです。その問いをめぐって瀬戸さんや、その場に居合わせた地域のおとなたちが、それぞれの考えを語り合い、正解を示すのではなく、多様な受け止め方があることを共有する時間になったと言います。瀬戸さんは、「思春期頃は考え方が硬くなりがちですが、いろいろなおとなの考えに触れることで、少しずつほぐれていく」と話します。

親や先生とは異なる立場のおとなが語る言葉に触れながら、こどもたちは「答えは1つではない」ことを知り、安心して考えを広げていくことができるのかもしれない。



●「背中を見せる」関わりが育てる信頼

みんなのBASEでは、子ども同士のトラブルに直面したときも、「言葉で話し合う」ことを大切にしています。瀬戸さんは、児童館での経験を振り返りながら、「トラブルがあると、おとなのところに来て『どうかしてほしい』と訴える子が多かった」と話します。

そうした場面で、すぐにおとなが答えを出すのではなく、「自分で解決するにはどうしたらいいか」を、一緒に考えることが大切だと考えてきました。話すこと、人の話を聴くこと、自分の想いを聴いてもらうこと。そのプロセスを支えるために、おとなが間に入りながらも、答えを示すのではなく、子ども自身が話し、考える場をつくることを意識しています。正解を急がず、対話を重ねること自体が、子どもたちの力になっていくと考えています。

一方で、子どもたちと向き合う中で、言葉で話し合うだけでは、難しい場面もあります。そんなとき瀬戸さんが語ったのが、「言葉で伝えるより、見せた方が早い」という実感でした。

トラブルが原因で近隣住民からのクレームがあった際、瀬戸さんが子どもたちの代わりに謝りに行ったことがあります。戻ってきてから子どもたちを責め立てることはせず、責任を共に受ける姿を示しました。するとその後、子どもたちは何も言わずにトイレ掃除を始めたと言います。それは、子どもたちなりの謝罪の気持ちが、行動として表れた瞬間でした。瀬戸さんは、「子どもたちは、『まずい、謝らせてしまった』ということをきちんと感じ取っているのだと思います。言葉で伝えるよりも、姿を見せた方が、心に届くことがある」と話します。

「責任と一緒に背負うおとながいる」という安心感が、関係性と信頼感につながっていく——みんなのBASEが「安全基地」である意味は、こうした場面にも表れています。



●居場所同士のつながりと、保護者への寄り添い

みんなのBASEは、宮城県内のフリースクールや居場所づくり団体が連携する「多様な学びを共につくる・みやぎネットワーク（みやネット）」に加盟し、団体同士が日頃からつながり、悩みや気づきを共有し合うことで、互いに支え合いながら活動を続けています。

「どの居場所にも共通する“想い”があるから、子どもたちは体調や気持ちに合わせて複数の場所を行き来できるし、保護者にとっても『どこに行っても信頼できるおとながいる』という安心につながります」と瀬戸さんは話します。

フリースクールに通う子どもの保護者の中には、不安や緊張を抱えながら日々を過ごしている方も少なくありません。「まずはここに来て、子どもを安心して任せられる時間を持てたことが、お母さんたちの安心につながっている——そんな言葉もいただいています。お母さんがほっとできる時間を持てると、子どもも少しずつ元気になっていくんです」と瀬戸さんは語ります。



●子どもたちへつなぐ未来

瀬戸さんが思い描く未来はシンプルです。

「ここを巣立っていった子どもたちが、いつか仲間として戻ってきてくれたらうれしい」。

みんなのBASEで育った子どもたちが、次の居場所をつくる担い手になっていく——そんな未来を、瀬戸さんは願っています。

子どもたちの「やってみたい」が、誰かの背中を押し、また次の「やってみたい」を呼ぶ。その連鎖が続いていく限り、みんなのBASEは、子どもをまんなかに多世代が集い、共に育つ居場所であり続けていくでしょう。



“ごちゃまぜ”が心地よい地域の居場所

あつ 集まっぺクラブ



令和7（2025）年12月20日、冷たい風が吹く中、太白区西中田の集会所である天神ふれあいセンターに次々と人が集まってきました。入口に立っていたのは、西中田第一町内会の鈴木久雄会長です。

「いらっしゃい」。そう声をかけながら、人々を迎え入れています。

扉の向こうに広がっていたのは、外の寒さとは対照的な熱気でした。笑い声が響き、あちこちで会話が交わされています。

この日に開かれていたのは、西中田第一町内会主催の「集まっぺクラブ」。令和6（2024）年の始まりから数えて、第4回となる今回は、過去最多となる約70人が参加しました。1歳のこどもから95歳の大先輩まで、世代も背景も異なる人たちが“ごちゃまぜ”になって思い思いに過ごしています。

なぜ、この場所には、これほど多くの人が集まって来るのか。様々な年齢や立場の人たちが、違和感なく同じ空間にいる。その理由を伺いました。

●「集まっぺ」という名前に込めた思い

集まっぺクラブは、3年前に、「こどもクラブ」という読み聞かせボランティアの中から、「こどものために、こども中心の活動をしたい」という声が上がったことをきっかけに、中田西部地区民生委員児童委員の草野恵子さんが、地域の集まりの場で呼びかけたことから始まりました。

「最近、こどもの声を聞く機会が少なくなっている」「朝食を食べずに登校しているこどももいると聞く」——そんな声も、背景にあったと言います。学校・家庭・地域、それぞれの間に、少しずつ距離が生まれているのではないかと。こどもたちが安心して過ごせる場所を、地域の中につくれないだろうか。そんな思いが共有されていきました。

「最初はこども食堂のような活動をイメージしていたんです。でも、名前が『こども食堂』だと、どうしても対象がこどもたちだけに固定されてしまう気がして」と話すのは、運営をサポートする中田西部地区社会福祉協議会の地域福祉活動推進員を務める佐藤せつ子さんです。



「鈴木会長からも、『(名前に) もっと広い意味を持たせたいね』というお話があって、高齢者も、障がいのある方も、みんなが集まれるように、仙台弁で親しみを込めて『集まっぺ』という名前になりました」と佐藤さん。

鈴木会長も深くうなずきます。「やっぱりイメージが固定されちゃうとね。ここには高齢者の方もたくさんいらっしゃる。みんなで集まる場にしたら良かった」と話します。

こどもをきっかけに動き出した取組ですが、話し合いを重ねる中で、「こどもだけの場」にするのではなく、世代を超えて集まれる形が望ましいのではないかと、という方向にまとまっていきました。高齢者も、障がいのある方も、子育て中の保護者も、同じ場所に自然に集まれること。その思いから生まれたのが、「集まっぺ」という名前でした。





こうして、西中田第一町内会を中心に地域の関係機関が協力して始まった集まっペクラブ。その言葉のとおり、会場では年齢や役割の線引きはありません。こどもも、おとなも同じ空間で過ごし、「誰のための場か」を決めない居場所として形づくられてきました。

特に、今回は柳生中学校父母教師会第一地区、柳生小学校子ども会第一地区の協力を得て、町内のこどもたちが一人でも多く参加してもらえるよう、丁寧な声掛けや準備が行われました。事前のチラシなどによる告知に加え、子ども会のLINEグループでも周知がなされ、当日の朝には「これから始まりますよ。途中参加も大歓迎です」といったメッセージも配信されたといいます。

● 世代が変わる「ごちゃませ」の時間

会の始まりでは「リノちゃん、ハルちゃん、フウタくん……」と、草野さんが参加者はもちろんスタッフまで、一人ひとりの愛称を呼び上げていきます。名前を呼ばれたこどもたちは、少し照れくさそうに、でもうれしそうに返事をし、会場全体から温かい拍手が送られます。

こうして一人ひとりを紹介し、拍手で迎えることで、参加者同士が自然と顔を合わせ、会場全体に「一緒に過ごす場」の空気がより一層つくられていました。「あなたがここに来てくれてうれしい」「ここはあなたの居場所だよ」というメッセージが、拍手の音に乗って一人ひとりに届けられているようでした。

この日のプログラムでは、みんなで楽しめるゲームやクリスマスソング合唱などのほか、食事の時間も組み込まれていました。会場の熱気を「食」で支えていたのは、地区社協の福祉委員を中心とする、料理自慢の皆さん。今回は、鈴木会長の奥様も調理に加わっていただきました。サロン会などで普段から顔を合わせているという皆さんは、楽しそうに声を掛け合いながら、手際よく調理を進めていました。

準備は当日だけではありません。前日から買い出しを行い、だしの仕込みなども分担して進めてきたといいます。普段はこどもたちと関わる機会があまりないという方も多く、「やっぱり『おいしかった』と言ってもらえるのが一番うれしい」と笑顔を見せていました。

今回、皆さんがつくったのは「はっと汁」。小麦粉を練って薄く伸ばした「はっと」を、しょうゆ仕立てのだしと季節の野菜やきのこなどと煮込んだ、宮城の郷土料理です。さらに、ふつくと炊きあがった三升のご飯も用意されました。

ご飯は、会場のみんなでおにぎりにして食べます。「上手に握れたね」「おかわりはいる？」——そんな声があちこちから聞こえ、自然と会話が生まれていました。



会場の一角では、小学校4年生の息子さんと3回目の参加だという佐藤さん親子が、周囲のおとなたちと会話を交わしながら過ごしていました。

「震災を経験して、いざというときに地域の人と顔見知りでいられるかどうかは大それだと思っていて。また、息子がおとなと話すのが好きなんです」と佐藤さん。

息子さんも、向かいに座った95歳の大先輩の話に耳を傾けながら、にこやかに相づちを打ちます。「いろんな人と話せるのが楽しい」と、照れくさそうに話してくれました。

年齢や立場の違いが、壁ではなく、会話のきっかけになっている——そんな空気が、この場を心地よいものにしていました。

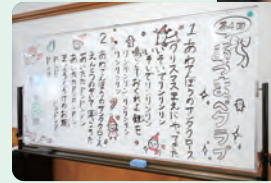
● さまざまな人の関わりが支える場

プログラムの合間や食後の時間の、あらかじめ細かく決められていない「空き時間」も大切にされています。その時間には、参加者同士で会話を楽しむ姿が見られるほか、ジュニアリーダーがバルーンアートをしたり、大学生ボランティアが宿題を持ってきた子どもたちに勉強を教えたりと、それぞれが思い思いの時間を過ごします。

高校2年生のすずあさんは「普段はジュニアリーダーとして、子どもと関わる機会が多いのですが、ここは小さい子から高齢者まで一緒に関わることができて、とても楽しいです。『はっと汁』もすごくおいしかったです」と笑顔で話します。

大学生ボランティアは、集まっぺクラブの立ち上げ当初から継続して関わってきました。会で歌う歌詞をあらかじめホワイトボードに書くなど、準備の段階から場づくりに加わっています。保護者や地域の方からは、「一緒に遊んだり、宿題を見てくれたりして本当にありがたかった」という声も聞かれ、子どもたちにとっても、おとなたちにとっても、心強い存在となっています。

こうしたジュニアリーダーや大学生ボランティアの関わりは、仙台市社会福祉協議会太白区事務所のコミュニティソーシャルワーカーである岩切拓朗さんが、人と人をつないできたことから生まれました。岩切さん自身も当日、運営の一員として場に加わっています。



また、隣室には、太白区保健福祉センターや仙台市社会福祉協議会太白区事務所、西中田地域包括支援センター、向日葵ライフサポートセンターによる、健康や暮らしに関する相談ができる場も設けられていました。

健康に関する展示やヘルプマークの案内、子どもの身長や体重測定なども行われ、気軽に立ち寄れる工夫が随所に見られました。相談を目的に来なくても、顔を合わせ、声を交わすことができる。そうした日常の延長線上にある関わりが、地域の安心感を支えています。

結果として相談へのハードルが下がり、顔なじみの関係の中で交わされる何気ない会話が、地域のセーフティネットとして機能していました。相談という形を取らなくても、自然に人とつながることができる。その積み重ねが、困りごとを抱えたときにも「ここなら話せるかもしれない」と思える土壌を育てていました。

集まっぺクラブは、運営を支える人たちを含め、様々な立場の人の関わりによって成り立っている場でもあります。



● 信じて任せる

鈴木会長に、運営で大切にしていることを尋ねると、返ってきたのはシンプルで力強い言葉でした。「相手を信じることだね」。

「こんなことをやりたい」「こうしてみたい」。そんな想いを、まずは役員同士で共有し、その話が少しずつ周囲に伝わっていく。すると自然と、「一緒にやりましょう」という声が集まってくると言います。「だから、(話し合いでは)ほとんど口出ししないよ」と鈴木会長は笑います。





この「信じて任せる」姿勢があるからこそ、運営に関わる人たちも遠慮せずに意見を出し合い、「自分たちがまず楽しくあること」を大切にしながら場づくりに向き合うことができます。

地区社協の佐藤さんも、こう話します。

「会長は受け入れ態勢が本当にバッチリなんです。私たちも遠慮せずに意見を言えるし、最初は漠然としていても、だんだんひとつの形にまとまっていく。自由に話せる空気があるんです」。

さらに佐藤さんは続けます。

「やっぱり、私たちが“楽しくやる”ことが大事なんだと思うんです。義務のようにやるのではなく、言いたいことは言いながら、自分たちが本当にやりたいと思えることを続けていく。私たちが次世代につなげていけなくちゃいけないので、それが、結果として地域のためにもなるのかなと思っています」。

一人ひとりの「やってみたい」や「できること」を信じて任せる。その積み重ねが、結果として、参加者が思い思いに過ごせる“ごちゃまぜ”の場を支えています。そして、その空気そのものが、次の世代へと受け継がれていくことを、運営に関わる人たちは静かに願っています。

● 受け入れられる経験が、次につながる

印象に残ったエピソードを聞くと、佐藤さんはこんなエピソードを教えてくださいました。

小学校低学年の子が、おにぎりを握って近くの席にいたおじいちゃんに差し出したそうです。ところが、そのおじいちゃんはすぐに食べないため「どうして食べないの？」と聞くと、「持って帰って、仏壇のおばあちゃんにあげたいんだ」と答えたと言います。

「こどもがおじいちゃんを思って『握ってあげたい』と思った気持ちと、自分で食べる前に仏壇にあげたい、というおじいちゃんの想い。そのやりとりが、とてもほっこりしたんです」と佐藤さんは振り返ります。

世代の違う人同士が自然に関わる中で、思いやりが行き交う——集まっペクラブらしい一場面でした。

こうした関係が生まれる背景には、受け入れる側の姿勢があります。

集まっペクラブの運営に限らず、鈴木さんは日頃から「信じて任せる」関わりを大切にしてきました。夏の暑い時期には、集会所をこどもたちに一部開放し、使い方や片付けも、話し合いながら任せてきたと言います。



「こどもには、こどもなりの考え方やルールがあるんだよ。だから私は、それを信用して、集会所の使い方を任せている」と鈴木会長は話します。

やり取りを重ねるうち、こどもたちがふらりと会長を訪ねて雑談をしたり、困ったときに電話をかけてきたりと、自然な関係が育っていきました。

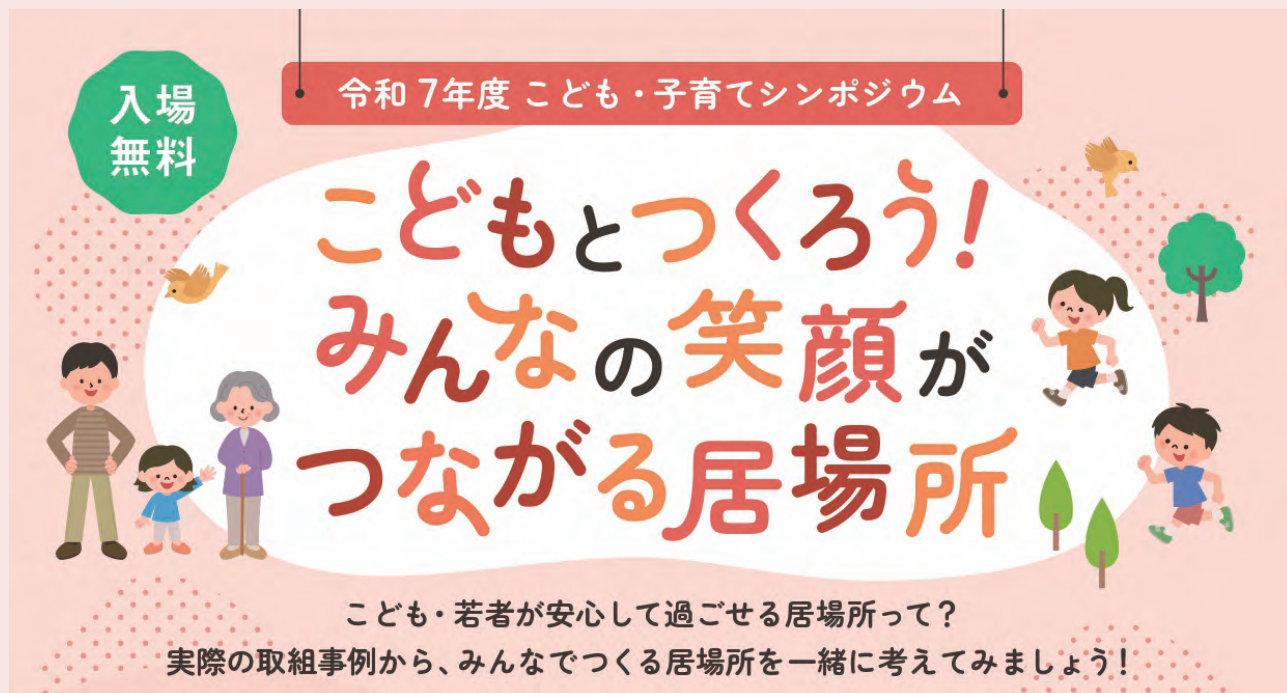
実際、集会所のものをこどもが壊してしまったときには、こどもたちが会長のもとを訪れ、「すみませんでした。これから気をつけます」と頭を下げたこともありました。また、「自分たちでクリスマス会をやりたい」と会長に相談に来るなど、地域の中の頼れるおとなとして認めてくれている関係も育っています。

「受け入れる側の姿勢が大事なんだよ。最初の関わり方で、ここが安心できる場所かどうかが伝わるからね。だから集まっペクラブでは、入口に立って『いらっしやい』って出迎えているんだよ」。

「いらっしやい」と迎え、「信じて任せる」。

その積み重ねが、人を呼び、関係を育ててきました。集まっペクラブは、こどももおとなもありのままでいられる、心地よい“ごちゃまぜ”の居場所として、これからも地域に息づいていくことでしょう。





令和7年度 こども・子育てシンポジウム

「こどもとつくりよう! みんなの笑顔が つながる居場所」開催報告

令和7(2025)年12月13日、こども・子育てシンポジウム「こどもとつくりよう! みんなの笑顔が つながる居場所」を開催しました。

本シンポジウムは、「こどもとともにつくる多世代交流の居場所づくり」をテーマに、地域で実践を重ねてきた担い手の声を通して、居場所の意義や可能性を多くの市民・地域関係者と共有することを目的として実施したものです。

こどもを中心に据えながらも、世代を超えて人が交わる居場所のあり方を、実践から学ぶ機会として、第1部での講演や事例紹介、第2部のトークセッション、第3部の交流会など、活発な意見交換が行われた様子の一部をご紹介します。

プログラム

● 第1部 活動事例紹介

講演

- 仙台こども財団理事長 湯浅 誠「こどもとともにつくる多世代交流の居場所づくり」

活動事例紹介

- 労働者協同組合ワーカーズコープ・センター事業団「みんなのBASE」施設長 瀬戸 理音さん
- 若林区荒町地区社会福祉協議会会長「すまいる食堂」代表 武川 由美子さん
- 西公園プレーパークの会 理事 佐藤 美嶺さん

● 第2部 トークセッション「こどもとともにつくる多世代交流の居場所づくり」

第1部の登壇者に加え、当財団理事長の湯浅誠、ファシリテーターに株式会社ばとんの遠藤智栄さんを迎えて、対談を行いました。

● 第3部 交流会 ～居場所づくりの気になることを聞いてみよう!～

活動事例ごとのブースに分かれての自由な質問・交流を行いました。

● 第1部 活動事例紹介

講演

「こどもとともにつくる 多世代交流の居場所づくり」

湯浅 誠 本日は、当財団の紹介として、大きく4つに分けて話します。

1. なぜ今“居場所”が必要なのか
2. “多世代”がつながる居場所
3. “こどもとともに” つくる居場所
4. 仙台こども財団の取組

居場所の必要性ですが、長く取組を続けていらっしゃる一方で、政策や社会全体の課題となってきたのは最近です。社会の認識が、かなりばらついているのが現状だと思います。

背景としては、人口減少、少子化、つながりが感じられにくくなっていること、こどもを取り巻く環境の変化、価値観の多様化があります。積み重ねてこられた方々の取組が、ようやく社会全体として「広がっていきなきゃいけない」と言われるようになってきた、ということです。

数年前から、政府の方針における表現の変化や、内閣府孤独・孤立対策推進室が設置されたことなど、こうした問題意識が社会全体に浸透しつつあります。

では、居場所とは何なのか？まずは、「居場所は色々ある」ということです。自宅の部屋が居場所の人もいれば、友達とワイワイするのが居場所の人もいるし、1人で釣りをしているのがいい、という人もいます。本当に色々です。

もう一つは、「本人が決める」ということです。本人が「ここが居場所」と言うなら、そこは居場所です。他人が「良い」「悪い」を決められるものではありません。

そして、居場所の数が増えていくほど、自己肯定感や自己有用感、チャレンジ精神、社会貢献意欲などが高まっていくことが、様々な調査から分かってきています。

行く先々で受け入れられている、見てもらえている、と感じられれば、「生きていていいんだよ」と言われなくても、「生きていていいのかもしれない」と思えます。行く先々が居場所になっていけば、自己肯定感が高まっていくだろう、ということです。

財団が増やしていきたい居場所

こども・若者が「ここが自分の居場所」と感じる居場所

多世代交流



こどもと
ともにつくる



当財団では、「多世代交流」と「こどもとともにつくる」の2つを掛け合わせて、居場所づくりを進めています。

従来、日本の人口構造はピラミッド型でしたが、少子化が深刻化する中で、その構成は大きく変化しています。そこで、こどもがおとなや高齢者と一緒に過ごせる多世代交流、最近では「ごちゃませ」「ませこぜ」とも言われるような関わりを大切にしながら、「多世代がつながる居場所」を、一つのテーマとして取り組んでいます。

こどもの視点に立った居場所づくり

- こども・若者が居場所と感じる場が「こどもの居場所」になるとすれば、居場所づくりを進める上で重要なのは、こども・若者の意見を聴き、こども・若者の視点に立ち、こども・若者とともに居場所をつくっていくことである。
- こども・若者が居場所に求める要素としては多様なものがあり得るが、こども・若者へのヒアリング等の結果を踏まえると、「居たい」「行きたい」「やってみよう」という3つの視点が特に重要である。

(こどもの居場所づくりに関する指針より)



こどもが決める居場所⇔おとながつくる居場所

こどもが感じる事
その場所を
居場所と感じること

隔たり

つくり手の想い
こどもたちのために
おとなたちがつくった
居場所

こどもの声を聴く

こどもが主体的に参画できる仕組みや機会をつくる



次に、「こどもとともにつくる」ですが、「こどものために」ではなく、「こどもとともに」です。ポイントは「本人が決める」ということです。

おとなが、「ここは居場所だよ」と想いを込めて場をつくったとしても、それだけで、そこに来る人の居場所になるとは限りません。日々その場がどう受け取られているのかを確認し、参加する人の想いを受け止めながら、運営していくことが必要になります。

こどもの居場所づくりにおける4つの基本的な視点



この図では、そうした姿勢を、「ふやす」「つなぐ」「みかく」「ふりかえる」という4つのプロセスとして整理しています。このサイクルをぐるぐると回していくことで、一つひとつの居場所がより良いものになり、結果として、子育てがしやすい地域が作られていく、というイメージです。

こうした考え方にに基づき、当財団としてもこどもの主体的な社会参画を促進する取組や、多世代交流の居場所を増やす取組を進めています。

居場所づくりによって目指すべき方向性



私は、世の中全体として「どこも」の居場所と「どこか」の居場所、その2つが、車の両輪となって回っていくといいと思っています。

「どこも」の居場所とは、家庭も学校も地域の中にも、「どこもかしこも」色々な居場所がいっぱいある、ということです。こどもだけではなく、より多くの人に、よりたくさんの居場所を、という視点です。

ただ、これだけでは足りません。どんな人にも、少なくとも一つの居場所につながるという、「どこか」の居場所もまた、必要です。

仙台子ども財団としてこれから取り組みたいこと

- 「どこも」の視点で居場所を増やしていく
- 社会全体でこどもの居場所づくりを応援する気運を一層高めていく

居場所づくりに取り組んでいる方
みなさんの取組を
ぜひ教えてください！

居場所づくりに関心のある方
身近な活動から
ぜひ始めてみましょう！

当財団では、「どこも」の視点を強調しながら、「どこか」の視点にも目配りして、こどもの居場所づくりを進めていきます。2つが車の両輪のように回っていく仙台市、あるいは社会をつくっていかねばと思います。

活動事例報告①「みんなのBASE」

瀬戸 理音さん（設立の経緯について）児童館で働く中で、たくさんのこどもたちや保護者との出会いがありました。学校に行かない選択、いじめによる自死、ヤングケアラー、ネグレクト、機能不全家族など、こどもたちを取り巻く、困難な環境に出会ってきました。

開所した令和3（2021）年はコロナ禍で、児童館も自由来館ができなくなり、児童クラブだけの児童館になってしまいました。利用にも制限がかり、こどもたちも、向き合う私たちも、少しおかしくなりつつあった時期でした。

そんな中で、安心・安全が保障できる居場所、こどもの権利（生きる・育つ・守られる・参加する）が保障される居場所、こどもが真ん中の居場所を、立ち上げる必要があると思いました。コロナ禍で密になるような居場所を今やるべきなのか、反対意見もありましたが、説得し続けて今に至ります。

立ち上げる時、私のこどもたちは中学生と高校生でした。大きくなるにつれて、お友達が学校に行けなくなるなど、色々な問題を抱えていく中で、「身近に問題があるのに通り過ぎていいのかわ」と、私だけではなく、働く仲間たちも自問自答していた毎日でした。この子たちが「助けて」と言った時に備えるために、敷居を低くして、立ち上げるなら今だと思いました。

当初は小さな場のつもりでした。ですが、今は5つの事業があります。全部、こどもたちや利用者の「こういうのがあったらいいな」からできた、みんなと一緒につくってきた事業です。



（みんなのBASE でみられた多世代交流の様子や、「こども企画書」などの取組を紹介して）このような形で、こどもたちと一緒につくってきた居場所ですが、「ごちゃまぜ」の居場所だからこそ直面する課題もあります。

近所のマンションの壁に落書きが続き、その度にオーナーさんに謝り、消しに行ったこともありましたが、SNSで、「私は怒っていないけど悲しい、みんなのBASEのことをみんなで考えてほしい」と発信したら、ピタッとなくなりました。

地域でこどもたちの色々な遊びが展開される中で、お叱りを受けに行ったり謝りに行ったりするのはよくあることです。ただ、親以外のだれかが一緒に頭を下げる姿を見せるのは、とても大事だと思っています。



また、小学校5年生の男子たちが、「みんなの居場所なのに、なんで俺たちが我慢しなきゃならないわけ?!」と、中高生との住み分けで揉め事が起きたこともあります。彼らは社会の縮図を学んでいると感じます。多くの人と場を共有することの難しさや、理不尽さについても、ここで学んでいると思っています。

ここに来るこどもたちは、自分で選択をして来ています。何をしたいか、だれと過ごしたいか、どんなことを話したいかが決まっていますし、あるいはここで探すこともできます。何もなくていい時間が保障されることも、求められていると思いません。

私たちケアワーカーからすると、「時間・仲間・空間・隙間・手間」は、こどもの健全育成においてとても大事とされていますが、これらを保障できる場所はなかなかありません。こどもの遊びは「汚い、危険、くだらない」の3Kと言われますが、それこそが大事だと思っています。なぜならば、私もこういった遊びを繰り返して、おとなになったからです。

こどもの権利と最善の利益の追求という意味では、今日一日を過ごして家に帰って眠りにつく時に、「今日も幸せだった」「今日も楽しかった」と思って寝てほしいです。

中学生・高校生世代への想いもあります。BASEに来ているのは、不登校の子や、様々な家庭環境に置かれている子どもたちも来ています。少しの期間だけ来られなくても、帰ってきたときに、やっぱり「おかえり」と言える場所でありたい。私たちスタッフは、それらを大事にしていきたいと思っています。

最後に、居場所という見栄えが良く、「楽しそう」や「にぎやかそう」と見えることもありますが、みんながいつもそうなのではありません。本当に色々な子を受け入れているのが、今の現状です。ここで会った子どもたちは、一度会ったら最後までだと思っています。楽しいだけじゃないし、向き合う覚悟はいつでも持っていたと思っています。

活動事例報告②「すまいる食堂」

きっかけはこどもたちの“孤食”

周りの人たちに背中を押されて…



武川 由美子さん 立ち上げについてですが……、ある時、コンビニでアルバイトをしている、近所の方の話を聞いたんです。 「小学生の兄弟が二人でコンビニに来て、弁当の所にずっと立っていたのよ」って。(その近所の方は) 気になって、「どうしたの？ お弁当を買いに来たの？」 「何がいいかな？ スパゲッティもあるし、焼きそばもあるし、サンドイッチもおにぎりもあるし」と言ったら、「お母さんに、『5時になったら安くなるから買うんだよ』って言われたから、5時まで待ってる」と言ったそうです。「(コンビニは) 5時になっても安くないよ」と(彼女が) 伝えたら、「これで、買えるだけおにぎりちょうだい」と。彼女の「あのおにぎりの数では足りないよね。もっといっぱい食べさせてあげたいよね」という話を聞いて、背中を押されたんです。また、市民センターの館長の「こども食堂をやるなら、応援するから頑張って」という温かい言葉にも背中を押されて、頑張ろうと決心ができました。

みんなの食堂に

「どなたでも参加できます」
とチラシに追加



食堂の申し込みは四日間なんです、期日を過ぎて申し込まれる方をお断りするの、とても辛いです。先日も、期日を過ぎてから電話があったのですが、電話のそばで、こどもさんが聞いていたんでしょうね、「ママ、ダメって言ったの？」という声が聞こえてきて、お断りするのが辛くなり、「まあ、その時はスタッフの分を減らせばいいか」と、お受けしたこともあります。

ボランティアに関しては、東北学院大学のボランティア団体「セツルメント会」の学生さんが、毎回10数名来てくださっていますし、五橋中学校の生徒さんにも、お手伝いをしていただいています。

食事をしに来ている小学生たちも、そうしたお兄さん・お姉さんたちの背中を見てか、高齢者の方が杖をついたり、荷物を持っていたりすると、手伝ってくれます。そうしたこどもたちの顔を見ていると、すごくニコニコしていて、本当にいい顔で、いいなってしみじみ思います。



色々な年代の方とのおしゃべりも楽しみのひとつ

すまいる食堂は、食事だけでなく、お楽しみ会もしています。地域の方のコンサート、こどもたちの歌、手品、松ぼっくりのクリスマスツリー、ビンゴゲームなどです。3月は特別に、お寿司屋さんのちらし寿司を用意し、桜餅2つとお吸い物、中学生の十八番の、キュウリの浅漬けも。食べる前に、みんなで童謡「うれしいひなまつり」を歌って。その時、中学生が9人も来てくれたので、「荒町小学校の児童がいっぱい来ているのだけど、まだ五橋中学校の校歌を知らないから、歌ってくれる？」とお願いすると、みんな立ち上がって、歌ってくれました。小学生は真剣に聞いていたし、高齢者の方たちは民謡調の手拍子を始めて、校歌に合わないけれど、すごく楽しそうでした。最後は割れんばかりの拍手でした。

その日、みんなが帰った後、お母さん小学校6年生くらいのお子さんが残っていました。お母さんが「初めて参加しました。参加してよかったです」と言ってくださり、話を聞くと、そのお子さんは学年が上がるにつれて、感情が出せない、記憶が残らないような状態になっていたそうです。その子が、中学生の歌を聞いた後、「ママ、今の歌、僕も中学校行ったら歌うんだよね」と言ったそうです。お母さんは、長い文章の言葉を聞いたのは数年ぶりでしたと、涙ぐんでいました。お母さんは「今から家に帰って、パパとおばあちゃんに教えてあげます。どんなにか喜ぶことでしょう」と言って、帰られました。



活動事例報告③「西公園プレーパークの会」



佐藤 美嶺さん 本日は、「西公園プレーパーク事業」と「西公園ちびパーク事業」を主に紹介します。

私たちは、「西公園プレーパーク事業」として、西公園で自由な遊び場「プレーパーク」を運営しています。また、「ちびパーク事業」として、妊婦さん、乳幼児家庭の子育て支援のために、西公園で自由な遊び場も運営しています。場所は仙台市青葉区の西公園内、西道路から北側すぐの、林の中です。

子どもとともにつくるプレーパーク

子どもが「この人に話したい」と思える関係づくり

大人の価値観で否定しない、ルールを押し付けない など
子どもが思ったこと（主体性）を、まずはそのまま受け容れる

子どもの話を聞く姿勢が大事

子どもは好奇心があふれ、遊びを生み出したくて大人に声をかけてくる
→「広げる」声かけで、やりたいことの延長線上に会話が広がる
親ではない大人が、話を受け容れる雰囲気を大事にしている

会う頻度が高くなれば関係性ができていくので、**遊び場（居場所）が子どもの生活圏内にあることが大事**

(取組において大切にしていることについて)「子どもとともにつくる」という視点で言うと、子どもが「この人に話したい」と思える関係づくりを、とても大事にしています。おとなの価値観で否定しない、ルールを押し付けない。こどもの主体性を、まずはそのまま受け入れる。そのために、こどもの話を聴く姿勢が大切だと思っています。

こどもは、初めて来ていきなり相談はしません。最初は好奇心があふれて、「これを教えて」「道具を使わせて」など、遊びの会話から入ります。そこで、「駄目」「できない」で終わらず、たとえできないことでも、「どうしたらいいかな」「他にこれを使えるんじゃないかな」と一緒に話していくと、その先に「実は悩んでる」「将来こうなりたい」等と、個人的なことを話してくれるようになります。この延長線上に会話があると考え、私たちは耳と心を傾けるようにしています。親ではないおとなが受け入れる雰囲気、意識しています。会う頻度が高いと、関係性は自ずとできていきますので、遊び場、つまり居場所が生活圏内にあって、自分一人でも頻繁に行ける距離であることは、とても大切だと思っています。

次に、親・先生以外のおとなとの関わりについては、家庭でも教育機関でもない「第三の場所」の価値を、とても大切にしています。公園はオープンスペースなので、いつでもだれでも来られて、人が混ざり合います。そこがメリットだと考えています。

親・先生以外の大人との関わり

家庭でも教育機関でもない
第3の場所という価値を大事にしている

オープンスペースなので
いつでも、誰でも来られる
→人が混ざり合う

- ・大人もいろんな人と出会い、楽しそうに話している姿を子どもが見る
- ・“地域で子育て”という大人の雰囲気

→子どもの社会への安心感が育まれる

子ども ↔ 親・先生

子ども ↔ プレーパークスタッフ

親・先生 ↔ プレーパークスタッフ

プレーパークスタッフ ↔ 地域の大人

地域の大人 ↔ 子ども

大人のやりとりを見て、子どもは人との関わり方を学ぶ

こどもと親、先生は、何もしなくてもつながっていますが、プレーパークのスタッフが、それぞれに関わり信頼関係を築く。そして、地域のおとなも信頼関係を築いていくと、プレーパークのスタッフがなくても、こどもと地域のおとな、親や先生と地域のおとなの信頼関係が、徐々にできてくると、活動を通じて感じています。

おとなも色々な人と出会い、おとな同士が楽しそうに話している姿を、こどもが見ることも大事で、「地域のみんなで子育てしていこう」という雰囲気をつくっていくと、こどもの社会への安心感が、育まれていくと感じます。こどもはおとなのやり取りを見て、この人は信用していいのか、初めて会った人と仲良くしてもいいのかを、感じ取っていきます。こどもは人との関わり方を学んでいるのだと、私たちも教えられながら、活動しています。

西公園プレーパークの会のつながりをマップにすると、地域の方をはじめ、たくさんの方と連携し、支えていただきながら活動できていると感じます。連携・交流は、毎年少しずつ広がっていて、本当に感謝しています。



● 第2部トークセッション「こどもとともに つくる多世代交流の居場所づくり」



トークテーマ①“多世代交流”の視点からの 仕掛け・工夫・失敗談・変化等

瀬戸（「工夫していることは何か？」という問いを受けて）日々思うのは、居場所とか児童館って、入口を通った瞬間に「どんな雰囲気、何を大切にしている場所なのか」が、肌感覚で分かるということです。そのため、雰囲気づくりはすごく大事です。

失敗談は本当にたくさんあります。立ち上げた当初、居場所が珍しかったのか、「こどもたちに何かやってあげたい」というおとなが、たくさん集まったんです。漫画を教えるんだ、これを教えるんだ、みたいなの。

でも、こどもたちって、「何かやらせよう」とか、いわゆる“支援臭”がすると、波が引くみたいにサーッとなくなるんです。善意のあるおとなとのマッチングがなかなか難しく、そこが難しい。その方々に対しても、丁寧に、こちらが大切にしたいことをお話ししながら、進めました。

佐藤（工夫していることについて）西公園って、普段子どもたちがワイワイ遊んでいる場所なので、お散歩で通りかかって「ここは子どもたちが遊ぶ場所」という雰囲気になってしまっ、年齢が上の方が、入りにくいことがあるんですね。なので、餅つきや昔遊び、流しそうめんなど、パッと見て「イベントをやってるな」と分かるような仕掛けを時々入れて、子どもだけではなく、近くの方も「どうぞどうぞ」と入りやすくする工夫をしています。

武川（話題が転換して、「子どもの力ってすごい」と感じたエピソードについて）県外からきて息子さんと同居を始めた女性の方なんですけど、夜ご飯はいつも一人で食べていると聞いて、私が町内の方に「すまいる食堂に連れてきて」とお願いして、来ていただいたんです。でも、笑顔もないし、声をかけても返事もなし、毎回つまらなそうで、「声をかけて悪かったな」と後悔してたんです。

ところがある時、その方が明るめの服を着て、すごく素敵にお化粧や髪を整えて、ニコニコして入ってきたんです。びっくりして、「どうしたの？どこからお出かけしてきたの？」って聞いたら、「そうじゃないの」って。前回、隣のテーブルにいた小学生に「僕のおばあちゃんになって」って言われたんですって。どういう意味で言ったか分からないのですが、その方にとっては天にも昇る喜びで、すっごくうれしかったそうなんです。

私たちがいくら声をかけても笑顔がなかった方が、その小学生の一言ですっかり変わって、今では5、6人でいらっしゃるのですが、先頭に立ってニコニコしていらっしゃる。子どもの力ってすごいなって、世代間の交流を見ていて、本当に思いました。



トークテーマ②「子どもとともにつくる」という視点からの仕掛け・工夫・失敗談・変化等

瀬戸（「子どもとともにつくる」という視点において大切なことについて）子ども企画書を通じて、子どもたちの想いを、可視化しながら一緒に考えていくのですが、おとなって人生の先輩だから、「こうした方がいいよ」「ああした方がいいよ」って言いたくなるんですね。

でも、子どもたちと同じ目線に立って一緒に考えながら、「危険じゃないかな」「難しいんじゃないかな」と思うことでも、「じゃあ、とりあえずやってみようか」と。できそうにないことでも、まずやってみて、どうしたらできるかを一緒に考える。そうやってつくっていくことが、大事だと思っています。

うまくいなくていいんです。汚くていいし、失敗してもいい。子どもたちは達成感があって、すごく満足した顔をするので、それで全然OKなんです。そういう仲間があると「じゃあ次は自分だな」「自分もやってみよう」って、相乗効果が生まれていて、いいなと思っています。

佐藤（瀬戸さんの話に続く形で）常々、子どもとともにつくる遊び場を、自分たちの中で大事にしていますが、子どもたちも「何やりたい？」と改まって聞くと、「別にー」と言われちゃうんですね。でも、仲良くなっていくと、普段の会話の端っこに、ポロッと「俺、クリスマス何もしなないんだよね」みたいなのが出てきたりします。そこを掘り下げて、「じゃあ、プレーパークでクリスマス鬼ごっこやろうか」というように、普段の会話から拾って、子どもたちの「やりたい」を形にしていって、こののを今までやってきました。

今年、初めて「子ども参画はしごプロジェクト」をやってみました。「プレーパークの良さを、もっと知ってほしいんだよね」と言った子から、ちゃんと打ち合わせをして、「じゃあ、この日にこういうことをやろうね」と決めて、プロジェクト的に伴走する形を始めてみました。

当日の朝、時間になってもその子がなかなか来なくて、ドキドキしたんですけど、やってみたら本人もすっごく満足していて、こういう取組も続けていいのかなと思いました。

佐藤（子どもたちへの普段の声掛けについて）基本的に、私たちがあまり話しかけないですね。なんとなく声が聞こえるぐらいの距離で近くにいる、という関わり方です。私たちは、子どもたちがしている遊びを「名前のない遊び」と呼んでいます。おままごとや鬼ごっこから始めて、その場で生まれた名前を付けようがない遊びが、どんどん広がっていく。そうした遊びを、子どもたち自身が遊び込んでいけるといいなと思っています。

その中で生まれるやり取りや、何気ない言葉を拾いながら、少しずつ話が広がっていくんですね。

武川（子どもとの関わりで印象的な出来事について）あんまり「子どもとともにつくる」というのはないんですが、私から「こんにちは、こんにちは」と言うようにしました。その子どもたちが、卒業式の後に来た時、食事が終わったら「ちょっと来て」と言われて付いて行ったら、廊下に一列に13人の子どもが並んでいて、みんなから「いつもおいしいご飯ありがとうございました」って。それを聞いた時にもう大感激で、「やってよかった」と思いました。これも一種の「つくる」ことかなと思います。

トークテーマ③活動初期の苦勞、工夫



瀬戸 苦勞といえば、立ち上げた当初は3か月くらい、利用者がゼロの状態が続いたんです。SNSで発信したり、児童館から周知してもらったり、手を尽くしましたが、なかなか利用者が来なかったんですね。それがあつた時、何人か来てくれて、そこから少しずつ、口コミで利用者が増えていきました。「来ない」時期にめげずに、とにかく続けること。その継続が大事だったと、今は思っています。

もう一つの苦勞は、地域からの見られ方でした。近隣の学校の先生などから、「怪しい場所だ」「あそこへ行くな」と言われたことも、実際にありました。そうした中で、私たちは何者なのか、どんな想いでこの場所をつくっていて、こどもたちとどう関わりたいのかを話したり、発信したりしてきました。

すると、利用しているこどもたち自身が、学校でそう言われた時に、「いや、そういう場所じゃないよ」「ちゃんとスタッフもいるし、ここではこういうことができるんだよ」と伝えてくれるようになったんです。今こうして続けられているのは、こどもたちのおかげです。

瀬戸（「自分たちは何者か」を地域に伝えることについて）五橋には荒町児童館があり、そこが私の最初の現場でした。その時、商店街のおじさんやおばさんたちに「地域連携ってこういうことだぞ」と、かなり鍛えられたんです。

そのつながりがあつて、十数年経つた今も、地域懇談会やさまざまな集まりに「ちょっと理音ちゃん来なよ」と声をかけていただき、そこで「私たちはこういう人たちで、こういうことを大事にしています」と話す機会をもらってきました。そうやって少しずつ、信頼や信用を積み上げてきたことが、今につながっていると思います。

佐藤（地域の方と信頼関係を築いていくことについて）活動初期は、地域にきちんと説明して、理解を得てから活動を始める、ということが十分にできていなかったんです。そのためトラブルが起きたり、「あそこ何やってるんだ」と言われたりすることもありました。

ただ、そうしたトラブルをきっかけに、何度も話し合いを重ね、信頼関係を築いてきたことで、今では地域の方々に応援していただけるようになりました。同じ西公園を活動の場所としている他の団体さんとも、話し合いを重ねて乗り越えてきたことが、活動のしやすさにつながっていると感じています。

現在は、地域の方々に活動を紹介する場として、さまざまな方を招いた「マネジメント報告会」を、年に1回開催しています。

武川（周囲の協力について）私は、地域とのかかわりであり苦勞したことがないんです（笑）荒町地区連合町内会や荒町地区社会福祉協議会、民生委員など、色々なところで活動してきたので、知り合いが多く、どこに行っても協力していただける環境がありました。これはすごくありがたかったです。

一つだけ苦勞したのは、三年前に始めたこどもの学習支援です。最初、大学生が6人来てくださったのに、こどもが3人しか来なくて、「これはもう、やめた方がいいかな」と思ったんです。学校運営協議会で教頭先生に相談したところ、チラシを配布してくださって。それから少しずつ、こどもたちが集まるようになりました。

本当に周りの皆さんの協力があるので、自分ではあんまり苦勞していないと思います。ごめんなさい。

トークテーマ④今後への想い



瀬戸「こういう居場所っていいよね」と言ってくれるこどもたちも出てきています。将来的に、私もずっとやれるわけではないので、後継者じゃないですけど、こどもたちが運営してってくれたらうれしいなと思っています。自分たちがしてもらったように、未来のこどもたちに向けて、色々なことを伝えていってくれたらいいな、というのが一つです。

もう一つは、フリースクールもやっているのですが、学校に来られないこどもたちの背景にいるお母さんたちのケアも、すごく大事だと感じています。

お子さんが学校に行かなくなってから、仕事を辞めるなど、色々なことを諦めるのはお母さんたちなんですね。

フリースクールはお金がかかるので、補助の仕組みも、まだ十分ではありません。だから、お母さんたちの就労の場所も、つくっていきたくと思っています。当事者性が強いからこそ、何が必要か、どういうケアが必要かを切実に分かっている方たちと一緒に働くことは、とても強い味方になると思っています。そういうことができたらいなと思っています。

佐藤 私たちは今後も、日常の遊び場であることをずっと続けていきたいのが、一番の想いです。今、毎週何曜日という定期開催ができていないんですね。お金の面も、スタッフの面もあります。

でも本当は、こどもたちがわざわざカレンダーを見なくても、行きたいと思った時にすぐ行ける遊び場でありたい。近隣の方たちとの連携も強めながら、こどもたちの想いを、行政にも伝えられるような取組をしていけたらと思っています。

武川 私たちは、開催が隔月なんですね。毎月開催するのが夢なのですが、なかなか難しいところですね。参加を100人で切ってしまうので、その後に申し込みの電話が来て、「もういっぱいなんですか」と、残念な声が聞こえてしまうと……。100人以上は難しいので、もう一回増やせたら、と思うんです。ただ、様々な問題があって難しいです。

最後に



湯浅 (これまでの話を振り返って) 今日は何ととっても、武川さんのトーク力ですね。さっきの「僕のおばあちゃんになって」の話や、電話の向こうで「ママ、ダメって言ったの?」は、同じ話をして、じわっと染みるように言える人って、なかなかいないですよね。驚きました。

地域活動を長くやってきて、地域との関係があまり苦労しなかった、とおっしゃる武川さんと、最初そこで苦労したお二人、という対比が面白かったです。岩手の方だったと思うのですが、これまで地域活動をやってこなかったけれど、何年か活動を続けている中で、少しずつ自治会長がこちらを見てくれるようになった、という話を聞いたこともあります。

全国の子ども食堂は、今年1700カ所以上も増えている一方で、小学校は200校も減りました。子ども食堂は、この10年で1万カ所増えましたが、小学校は、この10年で2000校なくなっています。小学校に限らず、中学校も減っていますし、そもそも、公共施設も建て替え時期に統廃合で数を減らしていて、減りこそすれ、増えることはない状況です。そういった、地域のコミュニティ拠点が減っていく中で、集まる場所や、つながりをつくらうとする人が増えている。皆さんのように、自ら始める人が増えていくのは、すごいことだと思います。

ただ、もうずっと聞いてきたのが、「うちの地域には、居場所を作るようなキーパーソンになる人が全然いない」という言葉です。これがなくならない。

瀬戸 (「地域のコミュニティ拠点が減っていく中で、……」の発言を受けて) 不登校に関しても、学校だけではもう難しいと思っています。先生たちは色々なことをやらないといけませんし、働き方改革で環境自体が難しい部分がある。そういうことは、民間にアウトソーシングしていただき、みんなで見ていく、みんなで一緒に取り組める社会になったらいいですね。そのために、私たちも発信していかなくちゃいけないと思っています。

佐藤 (キーパーソンになりうる人への支援について) 私の本業は防災なのですが、防災もまさに同じで、「うちの地域にはいない」と言われます。でも、地域をよく見ると、関心の高い人は必ずいるんですよね。プレーパークでも、遊び場のスタートアップ支援をやっているのですが、「やりたい」と思った人が、その想いを閉じ込めたまま、「でも私には無理」で終わらないために、「みんなでだったら、話し合いながら、少しずつ前に進めていけるんじゃない?」というような支援を、頑張っているところです。

武川 (佐藤さんの話が続く形で) 私は、上手にお誘います。人が足りない時には、「お願い、手伝って」と、あまり外に出てこない人に言うわけです。そうすると、なんとなく出てきます。そして、楽しくなります。そうすると、次の役もやってくれるようになるので、上手に引っ張り出すことが大事だと思っています。

遠藤 ありがとうございます。「上手に引っ張り出す」という、「手伝って」「助けて」と声をかけることから、現場に来てもらうことにつながる。そこから実態が分かったり、声が届いたりしますよね。

それでは、本日お話しいただいた皆さんに、改めて感謝の拍手をお願いいたします。今日はどうもありがとうございました。

● シンポジウムを終えて

湯浅 誠 子ども食堂への参加申し込み期日を過ぎて連絡してきた親と話していたら、受話器の向こうでこどもが「ダメって言ってるの」と言っているのが聞こえてきて、つらくなって参加をOKした、というお話がありました。



以前、ある子ども食堂の方が、雪の日に今日はお休みと決めたら、こどもが「今日はやらないんですか」と電話してきて、それで「あー待っててくれる人がいるんだと実感した」というお話をうかがったことがあります。

「本当に誰かの大切な居場所になっているだろうか」という不安を抱えている運営者の方は少なくありません。だからこそ、こどものこういう一言が、自分たちのやっていることの意味を確認させてくれて、続けていこうという気持ちを湧き立たせてくれています。

財団は、こうした運営者のみなさんの不安や喜び、心の機微に敏感でありたい、と改めて実感する一幕でした。



尚絅学院大学教授・だがしや楽校(がっこう)発案

松田道雄

どうして、こどもの居場所は 多世代交流型なの？

仙台子ども財団が大切にしている「多世代交流型のこどもの居場所をつくる」ということについて、あらためてじっくりと3つの場面で考えてみましょう。

まず、最初の場面は、はるか遠く私たち人類の始まりを想像することからです(図1)。私たちの祖先がアフリカで生まれ、長い長い旅を経て現在世界中で暮らすようになった秘密の一つに、人はどの動物よりもひ弱に生まれ、こども時代が長いゆえに、お母さん一人だけでなくたくさんの人の手を借りて育てられ、それによって人間の集団生活が高度化したからと言われています。たくさんの人たちの世話や手助けを受けてゆっくり育つことで、さまざまな環境の変化にも対応する可能性を伸ばし、また、自分がおとなになって次の世代をも同じように多くの人の手で育て、現在の人間社会が形成されてきたということです。「おばあちゃん仮説」という学説があります。一般に、多くの動物は次の世代を残すと親の役割を終えて寿命を全うするのに、「なぜ人はその後も長生きするのか？」という問いに対して、子育てを終えた人の親はその後も長生きすることで周囲の孫育てを手伝い、親たちの負担を軽くする。そのため長生きになっているという説です。これらを総合すると、こども時代を過ぎた若者も、親世代のおとなも、親世代を過ぎたおとなも、みなでこどもたちに関わる時間、そこそが、人が人たる特徴を共有する時間なのではないかと思うことができます。こどもがおとなに向ける笑顔、それを見て癒され見守るおとな。その一瞬の場面に人類進化の原点を見ることができるよう感じられますが、現代社会は、それを感じるゆとりもないくらいにすることがたくさん増えて、また、個々人の権利やプライバシーが守られる一方で、人との気軽なかかわりや、こどもへの声かけなどもできづらくなっています。それゆえ、こどもや子育てを考える時には、一息おいて人類の始まりを想像してみることは意味あることではないでしょうか？

次の場面は、そこから一気にとんで、現在のおじいさん、おばあさん世代やその前までの世代がこどもだった頃の思い出です(図2)。

図1 人類集団の始まり(概念図)



作図：仙台子ども財団職員チーム

明治から昭和はじめ、高度経済成長期までの地域社会の原風景は、「かつての地域コミュニティ」といったことばで、教育の文献や会議などでも語られます。コンビニやスーパーもまだなく、もちろん、電子ゲームやスマホもない時代です。ボランティアやコーディネーターやカウンセラーなどと言ったカタカナのことばも耳にしない時代です。人々は個人商店で買い物をし、買い物ついでに立ち話をし、こどもたちは、そこいらで遊びまわっていました。こどもたちがたくさんいた時代なので、こども相手におばあさんが駄菓子屋も売っていました。また、農村などでは、こどもも働くことは当たり前でした。おとなどうしも助け合って暮らしている中で、おとなは近所のこどもたちにも声をかけ、よその家でご飯を食べたりもして、さながら、近所や地域は家庭の延長上のような様相もあったように、よく回想されます。教育研究では、こどもたちにとって、親でも学校の先生でもないけれども、こどもの社会的な育ちにとって意味あるおとなを、「社会的おじ」「社会的おば」ということばで呼ばれました。このようにふりかえると、直接の親だけでなく、周囲のおとなたちが直接間接にかかわって、多くのおとなたちの手を借り見守られながらこどもが育つという、図1の人類の始まりの様相は、つい3世代くらい前まで普通に見られてきた光景だったのかもしれませんが、つまり、人類の歴史をふりかえれば、多世代交流型こそが、人間の子育ての原型なのだということがわかります。

図2 明治～昭和のこどもの様相（概念図）



作図：仙台こども財団職員チーム

場面は現在になります。仙台市に仙台こども財団が設立され、仙台市内でこどもの育ちを支援しているさまざまな取り組みを現地調査した第一弾（本誌）に紹介された5つの事例報告を読むと、そこには、現代社会の環境に応じながら、新たな姿形で、親だけでないおとなの方々が地域のこどもの育ちに関わろうとする多様な行為を目にすることができます（図3）。人類にとっての子育ての特徴（図1）、3世代前くらいまでの子育ての回想（図2）をステップにしながら、本誌5つの事例から汲み取ることができる、現代の多世代交流型の子育ての視点を5点提起します。

● 視点1 子育ての思いをつなぐ

「TAMARIBA/縁寿屋」の遠藤さんご家族は、ご自身がこどもの頃に駄菓子屋で過ごした楽しさと人の温かさを、今のこどもたちにも味わってほしいと、現代の駄菓子屋を開店されました。こどもたちがしたいことを信じて任せているという「集まっぺクラブ」の西中田第一町内会鈴木会長さんは、「自分たちもこどもの頃は自由にすることができたので、今のこどもたちにも自由に活動することを尊重したい」と話されています。自分たちがこどもの時に味わったよさや楽しさ（それはその時のおとなが直接間接にしてくれたこと）を、次のこどもたちにも味わってほしいという、子育ての思いをつなぐ世代リレー。この行為こそが、人類の始まりから営々とつながっている思いと行動なのではないでしょうか。「みんなのBASE」を運営している瀬戸さんが、「ここを巣立っていったこどもたちが、いつか仲間として戻ってきてくれたらうれしい」と語るそのことばには、親だけでないおとなたちが子育てに関わっていく人間文化の営みが継続して欲しいという願いにも聞こえます。

図3 現代 本誌こども支援活動事例から（概念図）



作図：仙台こども財団職員チーム

● 視点2 人として、こどももおとなも平等

とかく私たちは（特におとなは）、社会生活を役割としてふるまっています。親は親という役割をしなければと思いい、先生は先生の役割をすることを仕事として、組織社会に働くおとなはそれぞれの役割の肩書きでふるまい、物言いをします。こどもに対して、おとなが話したり、接したりする場合も、その役割で話す場合が多いので、ともすると、上から目線での言い方や、こどもの気持ちに寄り添うことなく言うてしまう場合があります。それは、こどもだけでなく、おとなどうしでも同じです。人は基本的に平等である、と教科書でことばを勉強しますが、日々の生活でどれくらいそのことを態度で実行して人と接しているかと自問すれば、私たちは誰もがはなはだ反省してしまうのではないのでしょうか。

「みんなのBASE」の瀬戸さんは、こどもと同じ目線で対等に接することを大切にしていると語っています。「縁寿屋」の皆さんも、「子どもと大人で楽しむポッチャ」の皆さんも、老若男女のみんなの食堂になっている「すまいる食堂」の皆さんも、こどももおとなも「ごちゃまぜ」を信条にしている「集まっぺクラブ」の皆さんも、みな共通に同じ気持ちのように感じられます。日頃は、家庭や学校や仕事などで、それぞれの役割を演じながら生きていく中で、一時（いっとき）、「ああ、人はみな同じなんだな、同じく悩みもありながら生きているんだな」といった人としての共感も、平等の感覚によって生まれるのではないのでしょうか。家庭でも学校でも職場でもない、多世代交流の居場所の本質的な意味合いは、お互いに立場を超えて人間としてそこに「居ることができる場所」なのではないかと思えます。こどもはやがておとなになり、集団生活の担い手になります。そして、やがて若い人の世話になります。こどももおとなも世代循環の中では、結局みな平等なのです。そのことを体感できる場所は、なんと人間らしい場所なのでしょう。

● 視点3 話食（わしょく）同源

「同じ釜の飯を食べる」というのは、人間関係の親密さを物語ることばの一つです。家庭の中で、毎日食卓を囲みながら、お互いに今日一日のことや話題などを語り合うことで、さまざまな生きる知恵や生活の機微を学び、心の安堵感を得ることができます。それらは、学校教育の中で定められた内容を教科書で学ぶ学習とはまた別の、もう一つの「人生を生きるための学習」です。何千年と続いた日本の縄文文化は世界でもまれな文化とされていますが、その中で、縄文土器を囲んでみなで食べ合いながら話し合った光景は、子育てや学校教育以前の教育や福祉の原型のようにも想像されます（仙台市縄文の森広場を訪れると、このことを想像できるでしょう）。荒町地区連合町内会会長兼荒町地区社会福祉協議会会長の荒川さんが「子どもだけで夕食を食べていると聞いて、『何とかしたい』と思った」という願いから始まった「すまいる食堂」、みんなでつくて食べながら子どもとおとな（おじいさん、おばあさん世代も含めて）が和やかに談義する活動や、宮城の郷土料理「はっと汁」とおにぎりをみなで食べ合ってから「ごちゃまぜ」の交流を楽しむ「集まっぺクラブ」の共食（ともに食べ合うこと）は、あらためて、口を介して、食べることで、話すことは一体であり、食べることが体の栄養になると同時に話すことが心の栄養になっているという姿を、現代社会の中で体現している取り組みと言えます。

また、人間（子どもたち）の生活にとって、主食だけでなく、お菓子の意義についても、駄菓子屋「縁寿屋」の皆さんの営みは再確認させてくれます。子どもが自分で買った駄菓子で友だちと分けっこする（分かち合う人間文化を体験学習する）、そして、駄菓子を介して友だちと話がはずむ。子どもにとっては、駄菓子は「話菓子（わがし）」なのです！ 子どもへの声かけ、会話を大切にされているという縁寿屋さんの皆さんは、そのことを、きっと、ご自身が子どもの時の駄菓子屋体験を通して実感されてこられたのでしょう。それは、「みんなのBASE」でも、子どもの発案から生まれた「だがしやBASE」からもわかります。そのような子どもの居場所を、おとなのバーやスナックなどにもよくたとえられますが、おとなも子どもも、人はだれでも何歳であっても、食べることを介してつながり、心身の温かさを得るのではないのでしょうか。

● 視点4 新たな環境を生かす

現代社会は、明治から昭和の時代に比べれば、さまざまな組織やインフラが整備されています。冒頭で、人類は環境に適応しながら進化発展して今日に至ってきたと言いました。子どもを支援する活動や取り組みも、それにあてはまります。図2の頃には、まだ、町内会や社会福祉協議会や市民センターや地域福祉事業所などといった地域社会の組織やしぐみは十分ではなかったと思います。逆に、当時は、空地や原っぱに象徴されるような「あいまいな時間や空間や人間関係」は今よりも多くあったかもしれません。昔のよさをなげくのではなく、今の環境や状況を生かして新たな姿形をおとながつくり出していこうとすることは、子どもにとっての一番の後ろ姿の教えにもなるかもしれません。かつての駄菓子屋は、周囲に、他の個人商店や、子どもの遊び場があったからこそ存在できました。縁寿屋の遠藤さんご家族が、現代の社会に駄菓子屋を再生しようと思った時に、全国を視察し、おとな（保護者）もいっしょに来たくなるよう、子どもみせ（駄菓子屋）とセットでおとなみせ（カフェ+美容院）も組み合わせたことは、かつての個人商店街のミニ再生のような感じでした。また、市民センターや集会所で行われている事例が、子どもだけを対象とせずに若者もおとな（高齢者）もみないっしょに混ざった取り組みも同様です。かつて、子どもがたくさんいた時代だったから駄菓子屋がたくさんありました。今は、高齢者がたくさんで、子どもが少ない時代です。だからこそ、たくさん的高齢者（おとな）から見守られながら子どもが育ち、高齢者も子どもから元気をもらえるような活動は、これからたくさん生み出すことができるのではないのでしょうか。

● 視点5 はぐくむ・はぐくもる文化

最後に、今回の5つの事例に共通することばでしめくります。「育」という漢字があります。「育（そだ）てる」（他動詞）と「育（そだ）つ」（自動詞）があります。親が子どもを育てる。子どもがすすすすく育つ。と、両者が主体となることばです。しかし、それだけでは足りない。ということ、今回の事例が示してくれているように思います。それは、もう一つの「育」の意味合い、「育（はぐく）む」（他動詞）です。「はぐくむ」の語源は、「親鳥がひな鳥を羽でおおい包む。心をこめて世話をする。保護して伸ばさせる」と辞書にあります。万葉集にも出ています。これと対になる自動詞は、「はぐくもる」とあります。「ひな鳥が親鳥の羽に包まれるように、いつくしまれる。かわいがられる」とあります。5つの事例は、親鳥の代わりに、地域のおとなが子どもたちを「はぐくむ」様相を感じることができます。杜の都仙台の中で、これからさらにあちらこちらで、子どももおとなも一緒になって「はぐくむ・はぐくもる」文化が生まれることを楽しみにしています！

● 編集後記

こどもの居場所づくりについての、ささやかな報告書をお届けします。

子ども達には家庭や学校だけではない「第3の居場所」が必要と言われ、仙台市内にも様々な「こどもの居場所」が作られています。私たち仙台こども財団でも令和5年の創立以来、多くの先達と交流する中で、令和7年度にはご縁があった方々に取材をお願いし、「こどもとともにつくる多世代交流の居場所づくり」という視点から、財団のホームページ等でその活動をご紹介する取組を行ってまいりました。本冊子では五つの取組についてホームページ掲載版より更に詳しくご紹介し、また昨年12月に開催したシンポジウムの内容も併せてお伝えしています。

シンポジウムでは当財団理事長の湯浅誠が財団の取組等をご紹介し、こどもの居場所づくりに取り組む方々からの事例発表の後に登壇者を交えてトークセッションも行いました。当日は様々な形での居場所づくりの担い手、居場所づくりに関心のある皆様にお集まりいただき、和やかな情報交換の時間も持つことができました。そんな雰囲気の一部もお伝えできれば幸いです。

取材に快く応じてくださった皆様、シンポジウムにおいでになった皆様、本報告書全体の監修と合わせて巻末に講評をお寄せくださった尚絅学院大学人文社会学類教授の松田道雄先生に、心より御礼申し上げます。

ご紹介できたのは、地域に数多く展開されている取組のほんの一部ではありますが、この報告書を手に取られた皆さんの間に「つながり」が生まれ、それらが地域にこどもの居場所が増えていくきっかけの一つともなれば望外の喜びです。

公益財団法人仙台こども財団

みんなで作るこどもの居場所

～仙台こども財団 令和7年度調査報告書～

令和8年3月発行：公益財団法人仙台こども財団

取材協力：株式会社ASA

